黒を喪くしたレイナーレ

もちごめさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夕麻と松田がイチャイチャするお話。

どうして夕麻は一誠を殺す前にデートしてたんだろう、とかとか考えてたらこんなのができました。レイナーレでなく夕麻ってとこがミソ。ただしヒーローは松田です。一誠の親友の松田君です。

需要ある？

全三話。

目次

前編 …… 1
中編 …… 19
後編 …… 42

前編

夜。

太陽は隠れ、空からの暖かなオレンジがちょうど消え失せた頃。春の肌寒い風が残りわずかとなった桜の花びらを攫って吹き、ざわざわとさざ波のような葉擦れを奏でている。

そんな静謐が流れる無人の公園で、突然、何かが落ちた音がした。

バキバキガサガサ枝葉を突き抜けたそれは植え込みの灌木に墜落し、クッションのように撓めて一際大きな騒音をかき鳴らす。折れ、湿った地面に落ちた騒ぎの一部始終は、しかし木々の壁に吸い込まれ、余人に届くことはなかった。ただ、遠くの街頭から届くおこぼれのようにか細い光だけが、植え込みをはみ出たその姿を照らしている。

うつ伏せに倒れているのは、一人の女だった。

暗がりにぼおっと浮き上がる白い肌。白磁のような滑らかさと相俟って、ともすれば作り物のようにも見える身体には、その美しさを汚す擦り傷切り傷が無数に刻まれている。騒ぎの代償に負ったのだろう。それらの傷は真新しい赤と青紫色をしていた。

だが、どれも深くはない。枝に打たれ、引っ掻かれた程度では、もちろんそう。無数にあることを加味しても、掠り傷の域を出ないものだ。

にも拘らず、女の肌色は死人と見まがうほど血の気の引いた病的な白だ。風に触れた葉先が傷口をなぞっても、ぴくりとすら反応しない。

落下の衝撃だって、木々に減衰されたためにさしたるものではなかったはず。では何故これほど衰弱しているのか。それは背中に見えていた。

血濡れだった。辛うじて背に繋がり、垂れ下がっているそれは、美しかった翼の残骸だ。付け根から先をごっそりえぐり取られ、原形のない赤黒い塊と化した欠損が、彼女の命を急速に削っていた。

絶え間なく零れて地に染みる血潮もさることながら、生命を侵す主

なる要因は別。潰れた翼のその傷口に残留する尋常ならざる力、滅びの魔力と呼ばれる特異な魔力による影響が大きい。わずかに残ったそれがゆっくりと、しかし確実に、女の中で効力を発揮しているのだ。

身体に酸を注がれ、じわじわと内から融かし進められている、というのが一番近い表現だろう。『自分』というものがとろけてなくなっていくような、例えるならばそんな恐ろしさが、無意識下の女の恐怖心を揺さぶっていた。やがて高まった根源的危機感によって無理矢理に失神から引きずり出され、得体の知れない強烈な冷たさが巡って意識を灯した女の脳は、ようやく思索の機能だけを取り戻し、思う。

どうしてこうなったのか。

虚ろな目を開け、女は浮かぶ疑問に導かれるまま、自身の記憶を掘り返す。

ほとんど夢現の中で考える彼女、堕天使レイナーレは、歩んでいたはずの栄光への道を思い返し、遡った。

堕天使の長、アザゼル様の命に従い、危険な神器（セイクリッド・ギア）所持者の抹殺を遂行すべく、配下を率いて毎日人間界を飛び回っていた。なぜ人間如きが危険となるのかはさっぱり理解が及ばなかったが、それでも評価されるのならと殺し続けたとある日、偶然にも神器（セイクリッド・ギア）の摘出と移植の方法を知り、さらに運よく有用な神器（セイクリッド・ギア）持ちを見つけたのは、確か今のような夜更けの時だったか。

それが、たぶん始まりだ。

どんな重症だろうがたちどころに回復させてしまう、強力な回復系神器、聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）を奪い取ることを、レイナーレは思いついたのだ。

持ち主である小娘は、聖女の身でありながらその力で悪魔を癒してしまったために教会を追放されていた。神器（セイクリッド・ギア）としての脅威度は申し分なく抹殺対象であり、中身は例に漏れない無垢（バカ）な子羊。そして、世の汚れを知らない箱入りは、得てしてそういう手合いに利用されやすい。

そうなった場合、間違いなくそれは、アザゼル様の言う危険な神器（セイクリッド・ギア）所持者だ。つまり、正当と見做せる任務の範疇だった。

多少上の命令から外れていても、殺せさえすれば証拠も問題も残らない。
それに、どうせ散る命なら有効に使ってやるべきだろう。理屈と建前で形作り、そのために差し伸べた舌先三寸の手は案の定、何の疑いもなく掴まれた。自らのこのこ処刑台にやってきた小娘は、途中、世話を任せていた配下の人間が勝手をしたせいで不信を抱きはしたものの、結局最後には思惑通りに十字架の上で死んだ。
そうやって得た力で、私は至高の堕天使になれるはずだったのに。
渇望が満たされた確信に歓喜したその直後、それを打ち砕かれる心境は、到底言葉にすることが叶わない。
崩れ始めたきっかけは、何だったのだろう。
――拠点とした教会が悪魔の縄張りの中であると、知ることができなかったからだ。
思ってもみなかった。上に怪しまれる可能性があると考え、調べようとしなかったのだ。
廃れたとはいえ教会があった土地に、悪魔が住み着くと考え難かった故の手抜きであるが、しかしその想像は外れる。一帯を治めるその悪魔は、残された微弱な威光など関係ないくらいの格の持ち主だった。
悪魔の名門である七十二柱の一つ、グレモリー家の娘だ。生まれた時からその将来を約束されている、赤髪の貴族悪魔だったという不運。
だが知っても、変わらず計画は続けられた。神器（セイクリッド・ギア）を奪い取る儀式の準備が完了間近で、放り出すには惜しいと未練が勝ったためでもあるが、それ以上に、それが名前ほど重篤な障害にはなりえないことを確信したがためであるところが大きかった。
悪魔の敵でもある神の信徒の一匹を、ただ殺そうとしているだけに過ぎないレイナーレ。地位と権力、それに名誉までもを持ち合わせる貴族悪魔は、実害のないレイナーレたちにその重い腰を上げることはなく、きっと敵同士のつぶし合いを傍観することを選ぶだろう、と。
根拠は縄張りであると知る前。気晴らしとカモフラージュを兼ね

て神器（セイクリッド・ギア）を宿していると思しき男を一日弄び、殺したことだ。
特別おかしなことをしたわけではない。何ら考えず、堕天使としての力を使って殺した。殺せてしまったそのことこそが証明書だ。隠しもせずに実行したそれを止めに来なかったとはつまり、搾取の対象（人間）が一匹殺される程度なら、気にしないということ。無断で縄張りに侵入したことすら、お咎めなしだ。
あるいは単に気付いていなかったのかもしれない。どちらにせよ、差し迫った脅威でない限り、自分には関係ないと思っているのだろう。栄えある堕天使を『カラス』などと称する、傲慢な悪魔らしい愚かさだと思った。
そんな奴らが相手ならば、構わなければいい。どうせ口だけなのだから、その存在をことさら脅威に見ることはなかった。
たとえ、殺したはずの神器（セイクリッド・ギア）持ちの男が赤髪悪魔の下僕悪魔として蘇り、小娘に情を抱こうとも、何ができるはずもないと気にも留めなかった。
不運にとどめを刺したのが、こうやってできた強固な思い込みだ。
すべて、打ち破られた。
念のためにと立てていた見張りの配下も、拾い物のはぐれ悪魔祓（エクソシスト）いも、そして、力を手に入れたレイナーレでさえも、その男に打ち倒された。
ごくありふれた神器（セイクリッド・ギア）を生まれ持っただけのつまらない男。才のない、つい数日前までどこにでもいるただの人間だったはずなのに、気付けば、至高の堕天使となったレイナーレは、その野望のすべてを踏み潰されていたのだった。
「……な……ん、で……」
手遅れであったはずなのに。
儀式は成功したのだ。無傷とはいかなかったが、攻め込んできた男の手は届かず、達せられた儀式は小娘の命を奪い、その身に宿していた力をレイナーレへと受け渡した。それでおしまい。抵抗は無意味に終わり、持ちうる者となったレイナーレの、その長く焦がれた念願が叶うと、決定付けられたはずだった。

下剋上など、現実には起こりえない。そうだと知っていた。なのにその時、何もできなかった無能な男は、無力ではなくなっていた。
いや、違う。私がくだらないと嘲笑った男は、端から力無き者ではなかったのだ。
男は身の内深くに眠っていた力、通常の神器（セイクリッド・ギア）など歯牙にもかけないほど強力な代物である神滅具（ロンギヌス）を目覚めさせ、容易く力量差を逆転させた。一度は蟻を踏み潰すように屠った相手に、あっけなく一蹴されてしまった。
挙句にようやく手にした力をも剥ぎ取られ、即死はせずとも致命傷。とどめを放った赤髪悪魔の眼を掻い潜り、気付かれることなく転移をしてのけたことだけが、唯一悪魔たちを嗤ってやれる戦果だった。
「……な……、で……」
あんなつまらない奴が、どうしてあんな力を持って生まれたのか。どうして、私にはその力がないのか。
長く苦汁を舐め続け、ようやく得たチャンスにリスクまでもを背負い、得ようと苦心したその力。すべてをつぎ込み、手に入れようと足掻き、誰よりも望んでいた。なのに今、身体は動かず地に這い、何も残らなかった命は消えかけている。
けれど、私がどれだけ求めても得られなかったモノを生まれ持ったあいつは――すべてを、まるでヒーローのようにひっくり返したあいつは――
「……。で……」
奴らには力があり、私には力がない。それだけのことなのに。
この世の中、力の大小がすべてを決める世界。栄光ある堕天使に生まれようが、容姿や身体がどれだけよかろうが、強さを必要とする世界では、ただのレイナーレなど一銭の価値も無かった。
強くなければ、至高の堕天使になれなければ、名すら見てもらえない。才能なき者は、集団を埋める戦闘員Ａでしかない。替えが利く消耗品だから、重要とされず、使い捨てられ、光は決して照らさない。
光の下にさえたどり着けない有象無象（弱者）故に、私は誰にとっても価値

が無いのだ。
どこにでもいる、どこにでもある、ありふれたこと。だから、
死ぬ時でさえ、こんなにも静かだ。
「……だれ……か……」
誰にも認められない。誰からも必要とされない。
ならば、この私という存在は――
「……あた……し、は……――。……たし、……を……」
だれか
「――み……て……」
光の消えた眼が、遠くに佇む街灯を映す。すべてが尽き果てる直前、熱に惹かれた真白い手が伸び、半ばで果てた。
レイナーレは溶け落ちる。溶けて、ぬるい黒に沈む。
黒い羽根と、腕に巻き付くシュシュの残骸が、風に攫われ夜空に紛れた。

肌寒さが少しだけ薄らいだように感じた。
全身の肌を駆け抜けていた冷たい風が淀み、底冷えがほんの少しだけ和らいでいる。触覚が感じ取ったその変化の刺激で、私は泥のような暗闇から意識を浮上させた。
ゆっくりと開け始める脳内。冷たい呼吸の中に青臭い緑と土と、酸っぱいようなにおいが混ざり合う。嗅覚に引っ掛かったそのにおいは、思考と、耳に流れ込んでくる音を理解するだけの機能を呼び戻した。
聞こえていた雑音は、葉擦れと、男の声だった。
「――し、死体……じゃあないよな……息はしてるし……。でもどういうことなんだこの状況……酔っ払いの……お、お姉さん？な、ならやっぱり、起こすべきだよな……？」
妙に気食の悪い好色そうな声色が、私の肩に触れた。布越しに感じられるのは、熱いくらいに温かい手の温度。
「お、おおお……お、オレ、女の子に触ってる……服が薄いせいでほと

んど直の肌の……い、いやいやいや、そんな場合ではなく……お、おーい、誰かは知りませんがお姉さん、こんなところで寝てたら風邪引きますよー……」

「……寝て、ないわよ……それ、やめてくれる？」

おっかなびっくりに肩を揺する温かい手は冷えた身体に心地よかったが、同時に滲んできた手汗は少々気持ち悪くもある。ヌメッた肌触りに対する嫌悪感が半ば自動的に手を払い、戻りきらない平衡感覚のまま、私は乾いた地面に腕を張って無理矢理上体に力を込めた。

まるで生まれたての小鹿のように筋肉が震えた。立ち眩みのような明諦観が続く頭も相俟って、再び倒れ伏しそうになる。それを歯を食いしばって堪え、細い枝葉の中から身体を引っこ抜いて起き上がった。

ふらつく頭を上げ、そこでようやく瞼を震わせた私は、次いで夜眼に浴びた逆光に眇めながら、そいつの姿を眺めた。

坊主頭だ。学生服姿がいかにも野球部の印象を醸しているが、体形はそうでもない中肉中背……いや、少しだけ筋肉質か。ともかく、どこにでもいそうな男だ。

そんな彼が、眼を血走らせて、なぜか私の胸元を凝視していた。

「――お、おおお、おっぱ……なま、生が、目の前に……っ！」

なんだと視線を下げれば、すぐに察した。土で汚れた薄手のブラウス。身に纏うそれに穴が開いていた。偶然にも、胸の部分。

不自然とすら思えるほどの破れ具合が実に都合よく胸を強調し、卑猥な具合に魅せている。間に挟んだ植え込みの灌木は高さが絶妙に足りず、垂れた黒髪は枝に引っ掛かって肝心なところを隠していない。おまけにどうやら背中部分もぱっくり破れているらしく、腕にだけ通っているそれは今にもずり落ちそうだった。

上半身全裸の直前で辛うじて堪えている。なんという奇跡だろうか。つい反応が遅れてしまった。

「……ちょっと、いつまで見てんのよ」

隠しつつ凄んでみせると、でろんでろんに鼻の下を伸ばした男が慌てて両手で目を塞いだ。スケベ面のまま、指の隙間から一秒に一回の

ペースでチラ見してくるが、まあそれ自体はそこまで悪い気がしないので諦める。もったいつけてため息を吐いてやってから、私は毅然と要求した。
「アンタの服、貸しなさい。私を凍えさせる気？……ほら、さっさと！」
ピンク一色な彼の耳には入らず、催促のために片腕を伸ばす。
途端、スケベ男は鼻血を噴いた。
「おぶっふぉぁあッ!!わ、我が人生に一片の悔いなしッ!!元浜、一誠、すまんがオレは先に行くぞッ!!」
などと、鼻を押さえながら訳のわからないことを叫ぶ変態。片手の隙間から鼻血を漏らし、もう片方を拳にして突き上げるその様子は、歓喜する彼と対照的に、命令をシカトされた分も合わせた苛立ちの火種を私へたきつけてくる。
バカなんだなと笑いはすれど、やはりどうして寒いのだ。特に胸元。片腕で支えるには色々とはみ出してしまうたわわな胸が。
「寒いって言ってるでしょスケベ男！いい加減にしないと殺すわよ！アンタのその着古しでいいから私に寄こしなさいって……早く！」
「あばッ!!は、はいただいま!!」
一喝でひっぱたいてやると、ようやく変態は我に返った。とはいっても言葉が通じたのみであり、獣のようにぎらつく好色の視線はそのままだ。ブレザーのボタンにとられた手は最低限の自制すら忘れ、見開いた目で隠す気もなく私を嘗め回している。
ある意味では悪化だろう。見られるのはまだしも、見放題と思われるのは腹立たしい。
「まるで猿ね、エロ猿。ちょっとは我慢できないわけ？」
「が、がが、我慢と言われましても……お、男の性というか……この見事なプロポーションを目に焼き付けないのは、逆に失礼というか……」
「……ふぅん。まあ、ね。アンタ程度の男じゃ、今後一切目にする機会なんてないだろうし、無理のないことかしら。この私の……栄光ある……栄光……？」

なんだっけ？
ふと意識を撫でた違和感に、思いがけず言葉が詰まった。続くはずの先が、ない。
まだ頭が本調子ではないからだろう。そう考えるも拭えない奇妙な違和感は、しかしエロ猿がようやく寄こしてきた上着の存在に押しやられた。
「ど、どうぞ。今日も覗きがバ……じょ、女子とちょっと追いかけっこしてたから、汗臭いかもしんないけど……」
タイミング悪く吹いた風に鳥肌立ち、注意は耳に入らなかった。違和感の気持ち悪さとごちゃ混ぜになった悪寒に震え、ひったくるようにエロ猿の手から上着を奪い取ると、さっさと羽織って前を塞ぐ。厚い布地に残る体温と肌触りは、キモさよりも安穏としたため息を引き出した。
次いで鼻を突いてきた汗の臭いもその温もりを手放させることはできず、私は努めて昂然と言い放った。
しかし、なんとか態度に張り付けたそれは、すぐに剥がれることになる。
「くっさいけど、まあ我慢してあげるわ。これで本当にボロだったら、間違いなく殺してたけど」
「うぐ……どうしてだ、オレ悪くないはずなのに……でも美少女の罵倒と思うと興奮が……て、ていうかさ、そもそもなんでそんな格好でこんなとこに倒れてたんだ？もしも、え、エッチなビデオの撮影とかなら、その、秘蔵のコレクションに加えたいからいつ発売か教えてほしいなー、なんて……」
「……アンタのこと、エロ猿って言ったけど訂正するわ。猿に失礼だもの。少し考えればわかることでしょ？何を勘違いしたらそんな水商売が出てくるのよ！私は……わ、私……？」
まただ。
何かがない。思うがまま、半ば条件反射的に吐かれる言葉が、その途中でぷっつりと途切れてしまう。
「ご、ごめん！そうだよな！もしそうなら女優さんを泥まみれで放っ

ておくわけないし……でもじゃあ、結局黒髪おっぱもとい！……あー……えっと……」
自分の中の何かがない。自分が、ない。参照するその先が、まるで空白であるかのよう。
今度は忘れ去ることができぬまま、その暗幕は変態によってこじ開けられた。
違和感の正体に、私は気付いてしまう。
「お、お名前を、お伺いしてもよろしいですか……？」
自分の名前が、わからなかった。
「――わからない」
「……へ？」
名前だけではない。自分を形作る自己認識、自分がどういう人物でどういう生を送ってきたのか。自分に関するすべてが、何一つ思い出せなかった。
自分が何者なのかわからない。連鎖的に理解したその事実は、変態のへりくだったスケベ面がキョトンと呆ける、眼前でのその変化さえも眼に入らないくらいに激しく、奈落へ落ちるような極寒を私に与えた。
「うそ……うそでしょ……？なんで……どうして思い出せないのよ……！名前も、なにも……っ！」
頭を抱え、痛いくらいに締め付けても、全く何も出てこない。自分、という型に、中身が入っていないのだ。
空っぽ。何もない。あったかもしれないけれど、今はない。なら見出せる価値だってないから、私は私がわからなかった。赦しも、必要も、何も。
空白である、それ自体が恐ろしい。極寒の吹雪の中、一人立ち尽くすような悪寒戦慄があった。『自分は何者なのか』という問いだけが、脳内をギシギシ軋ませ、延々と巡っていた。
「年齢、は……か、家族……仕事……役目……なんで……なにも、ないのよ……」
なら、どうして私はここで息を吸っている？

頭が痛い。気分が悪い。
混乱の極みにある頭では、考えれば考えるほどに手足の感覚が消えていく。その度に、自分が何か異様な生き物であるような気さえして、一人放り出された絶望感と共にますます吐き気が強まった。
胃液が込み上げ、背を折った。その時、両肩を熱い手が支えた。
「ええと……と、とにかく落ち着けって、な？大丈夫だからさ」
感じ、私は辛うじて吐き気を踏み留めた。男の前で嘔吐などできないと、思い出せない教養が引き留めたのだろうか。そうだといいな、と、顔を上げた。
「……」
植え込みに半身を突っ込んだ男と眼が合った。瞬間、わずかに見張られる。半開きの口が固まり、すぐにはっと我に返ると、続けられた。
「自分のことが思い出せないってことは、要するに……記憶喪失って奴だろ？テレビで見たことあるぜ！そういうのって、行ったことのある場所とか見たことある景色とか、ふとしたきっかけで思い出すことがあるんだよ！」
ほんのりと頬を紅潮させ、身振り手振りでまくしたてる。一生懸命なさまは、ともすれば滑稽にも見えた。
その眼に情欲の陰が見えることに、今は少し落ち着く。
「他には確か……薬とかカウンセリングとか……だったっけか？と、とにかく思い出す方法はいくらでもあるんだよ！もしかしたら案外簡単に夕麻ちゃんの記憶だって――」
が、その一言で情動が再燃した。考える間もなく身体が動き、肩を掴む男の手を取り返してそのまま押し倒す。
ばきばき、と、男は背で根元近くの枝をまとめて圧し折り、挙句地面に頭をぶつけた。突然の痛みにうめくも、しかし私には些末なこと。息つく間もなく叫んだ。
「アンタ、今ゆうまって……！それ、私のことなの!?私を知ってるの!?ねえ!!」
自覚なく、男の襟首を掴んで滅茶苦茶に揺さぶる私。種類の変わったうめき声はガクガクと揺れ、男は制止の声も手も出せずにされるが

ままだったが、数秒も経たぬうちに私の方に限界が来た。じんじんと来る痺れが腕を縛り、耐えきれずに力が抜ける。
　同時に少し冷静になった頭は、落とされ再度後頭部を打ち付けた男の、その答えを予感していた。
「いや、その、つい口を突いちゃったっていうか……えっと……な、なんとなく夕麻ちゃんっぽい雰囲気してるなーって、そう思ってたからで……ご、ごめん……」
　知っていれば、そもそも慰めなどしないだろう。
　悟ったそれを改めて耳にして、一気に気が抜けた。
「なによ、雰囲気って……。バカみたい」
「う……ほんと、ごめん……」
　落胆が心を重くする。だが不思議と波立ってはいなかった。渦巻いていた不安が鎮まり、そこにあるのは緩い諦めのような感情のみ。
　私は気まずさに苦り切った男が挙動不審に慌てるさまを、ため息吐いて眺めた。
「ああっと……じゃあ、じゃあさ、新しい名前……ていうか、あの……仮……そう、仮だ！仮の名前考えようぜ！オレ馬鹿だから、決めとかないとまた変なこと口走っちまうかも――」
「別に、いいわよ夕麻で。アンタの頭じゃ決め直してもごちゃごちゃになりそうだわ。……そういえば、そういうアンタの名前は何なのよ？」
「お、オレ？オレは松田だよ。駒王学園二年。でも……そうか……。気に入ったんなら、言うことじゃないよな」
　何をよ。と詰りかけるも、松田のその挙動不審具合がキモい方面にシフトし始めたことにより、声にならず失笑が出た。
「そ、それよりもだけどさ、夕麻ちゃん。その……お、オレの上着だけじゃ、さ、寒くない？」
　キモいどもりとキモい視線を復活させ、気持ち悪く身体をくねらせる。さらには上目遣いまでもを駆使して一気に私の嘲弄の口角を上げる松田は、若干前かがみの正座にて、気持ち悪く微笑んだ。
「そ、その恰好もアレだしさ、どこか、あ、暖かい所に行かない？お、

おお、オレ、の、家……とか？」
　バカみたいにぷんぷんにおい立つ童貞臭の前では、落胆の直後とはいえ笑いを堪えることなど不可能だった。
「ぷっ……！ふふふ……！松田、アンタそれ、私を誘ってるつもり？ほんとバカね。今時子供でももっとましな口説き文句を吐けるわよ」
「ごふぅ!!こ、心に突き刺さる嘲笑……。でも……なんでだ、やっぱりちょっと……快感……」
「あら、エロ猿がマゾ猿になっちゃった？可哀そうなことしちゃったかしらね」
「い、いえ……むしろご褒美……」
「ならよかったわ。正直なけだものには、それこそご褒美が必要ね」
　私は腰を上げ、若干ふらつきながらも立ち上がった。眼下で座し、見上げてくる松田の視線がたまらなく心地よい。真っ赤になったその顔に、頬がぐっと持ち上がった。
「アンタ、私を連れ込んで何がしたいの？記憶喪失の美少女を家に入れて、何を期待しちゃってるのかしら？」
「ききっき、期待も何も、オレはただ夕麻ちゃんにあったかく――」
「正直に言いなさい。ご褒美が欲しくないの？」
「ごめんなさいちょっとそういういい感じのエッチなイベントがあったらいいなとは思ってました！」
　正座から滑らかな土下座。ああ、やっぱり大バカだ。
　背を駆けるゾクゾクとした震え。興奮で自分の頬までもが赤熱していることを自覚しながら、私は喉から若干裏返った喜色を吐き出した。
「いいわよ？」
「え？」
　だらしないにやけ顔が、私を見て目を丸くした。その先に、私は手を添える。
「そこまで私が欲しいなら、いいわよ？ほら、連れて行って？」
　私と手との間、視線を行ったり来たりさせる松田に、最後の一押しでにんまり微笑む。渾身の妖艶は彼の腰を引かせ、割れ物を扱うよう

な緩慢極まる躊躇いをも乗り越え、手を取らせることに成功した。
顔を見ずともその緊張が明らかなほどの手汗には目を瞑りつつ、私は、引けてはいるが腰を上げた松田のエスコートを期待して、その手を少し強く握った。
おずおずと引かれた、その一歩目だった。

「やめておいた方がいいと思うわよ。そいつは」
女の声に、私はそっちへ振り向いた。
茶髪のおさげ眼鏡。気の強そうなその垂れ目と視線がぶつかる。
当然その姿に見覚えはない。が、じとりと私を睨め付ける眼差しは、本能的な部分で少々癇に障った。こいつとは気が合わないと、女の感がざわめいたのだ。
向こうも同じなのだろう。故に前かがみの松田が慌てて反論した時も、私を警戒するあまり、応えに僅かの間があった。
「い、いきなりなんだよ桐生。オレは別にヘンなことしてるわけじゃ……ないぞ……？」
「……聞こえてたから、あんたたちの会話。それにその様、ナニおっ勃ててるようじゃ世話ないわ。ていうか、臨戦態勢だと結構でかいんだ。さすが野獣」
どうやら二人は知り合いらしい。鼻を鳴らして眼鏡を押し上げる女、桐生と、ますます顔を熱くして股間を押さえる松田。彼はちらちらと私の反応を気にしているようで、思わず笑みが零れた。
愉快と不愉快が入り混じる妙な気分のまま、私は桐生にも笑いかける。
「心配どうもありがとう、桐生ちゃん？でも生憎、杞憂よ。この私が、こんな童貞のいいようにされるわけないじゃない」
「本当にそう？どう取り繕っても、あんたは女じゃん。無理矢理襲われてもそんな口が利けるわけ？」
「それこそありえないわよ。このヘタレに自分からそんなことする度胸があると思ってるの？」
「……まあ、それに関しては否定しないけど」

「いや否定……やっぱ否定しなくていいけどよぉ！なんだよ二人してオレを放置しながら罵倒しやがって！ホントに新しい扉開いちゃうだろ！」

とうとう松田がつっかかった。腹に据えかねた反発の割には暴発の度合いが大きいが、もはや止まれぬ彼は続け、桐生に焦点を向けた。

「大体、なんだよ桐生！『やめたほうがいい』って！オレはただ、ここに居ちゃあ夕麻ちゃんが寒いだろうって……そりゃあ、それだけじゃないけど……し、心配まで嘘だって思われるほど、オレって信用ないのか!?それに、じゃあ夕麻ちゃんはどうするんだよ。聞いてたんだろ？」

ぶつけられ、桐生の目がむすっとしかめられる。そんなのわかるだろうと言わんばかりにため息を吐き、私を一瞥して言った。

「下心百パーだって思ってるわけじゃないけどさ、松田、実際どうするつもりだったわけ？この子家に連れ込んで。……どうせあんたのことだから、持ってる女物の服なんてエロいコスプレ衣装くらいでしょ。そんなの着せて警察でも行ったら、それこそ一発じゃん」

「え、エロいだけじゃねぇよ！花弁ライダーピンキーはこう……前衛的な芸術性が……いや、だとしてもなんでわざわざ警察行くことになってんだよ！そりゃ不審者に見られるわ！ていうか、目ぇ付けられてんだよオレ。一回マジに怒られたことがあって……」

「……あんた、まさかほんとにわかってないの？」

胡乱げに眉を寄せると、桐生はまた私をチラ見した。相変わらず疑い深い小娘は、それでも最低限気遣いを見せたが、当の私はどうであれ気にならない。そも憶えていないのだからと、肩をすくめて失笑を深めた。

「純真無垢（無知でバカ）な童貞だけに、夢見がちなのよ、アンタ。よく考えてみなさい。私みたいな美少女が、ほとんど裸に剥かれて公園の茂みに転がされてたのよ？しかも記憶喪失。石に躓いたとでも思うわけ？どう見ても事件じゃない」

「そ、それって……！」

ようやく理解が及んだらしい松田が息を呑んだ。顔のほてりが消

えて、繋いだ手の力がより一層強くなる。何かを堪えるかのように、全身が強張っていた。
　オスの独占欲。自分が眼を付けた女がすでにかじられた後だったという屈辱は、目覚めかけの松田にとって強い衝撃だったに違いない。劣情よりも憤りを覚えるタイプだったようだが、中々に期待通りの嫉妬だ。思い詰めるみたいに私を見つめるしかめっ面の視線に、さらなる愉悦が全身を巡った。
　やっぱり、こいつは揶揄い甲斐がある。単純で性欲第一なおバカであるからこそ、随分と胸がすく。おまけに楽しいともなれば、もう言うことなしだ。突然現れた桐生なる小娘など、どうでもよくなるくらい。
　溢れかえる満悦。そのまま、桐生に向けてやった。
　だがすぐに、私の上機嫌は崖から突き落とされた。
「正直、私は疑わしいと思うけどね。でもだからこそ、警察には届け出ないと」
　合った眼の、冷たさが身を貫いた。
「……疑わしいも何も、憶えてないって――」
「だからそれよ」
　桐生が放つ冷ややかな空気に笑みを保てなくなり、私は閉口せざるを得ない。
「記憶喪失って言うけど……悪いけど、どうしても嘘っぽく聞こえるのよね」
　だから続く詰問にも、とっさに反論できなかった。
「証のあることじゃないから、口だけでどうとでもいえる。転がされてたわりには目に見える怪我もないみたいだし」
　言う通り、私の肌には土汚れ以外、傷らしい傷など刻まれていない。滅茶苦茶になっているのは衣服だけだ。それが、不自然だというのか。
「それに本当に記憶喪失なら、どうして松田の、男の家に行くなんてことを一番に言いだすわけ？……家出の常習犯とか美人局とか、そういうのばっかに思い至っちゃうのって私だけ？ねえ、松田？」

「ねえって……桐生お前……」
　唖然とした松田の横顔。桐生はさらに、私の心を凍えさせた。
「だからあんた、服なら私のを貸してあげるから、今日の内に警察に行くべきよ。もし可哀そうな環境にいるのなら力になってくれるはずだし、そうじゃなくても一晩くらいは泊めてくれる。ほら、わざわざ一般人の家に転がり込む必要なんてないじゃん」
　喉が引き攣った。
「だ、だからよ桐生！何でお前、夕麻ちゃんが嘘ついてるなんて前提で話してるんだよ!?夕麻ちゃんがそんなことするわけないだろ！」
「つい数分前に出会ったばっかの女の何がわかるのよ。……ていうか、どちらにせよ私たちの手に負えないってわかるでしょ？家も家族も、自分のことすらわからないって、ほんとまともに生きていけないような状態なんだからさ、それをどうにかできるとしたら行政くらいじゃない。あんたも……夕麻でいいのよね？記憶が戻るまで文無しのホームレスする気？」
　急速に逆戻りした不安と恐怖に、私は再び満たされる。いや、むしろその底はより深いように感じた。吹雪などではなく、鋭いつららが私の心に降り注ごうとしている。
　想像してしまった途端、桐生の眼を直視できなくなり、身体が強張った。
　だが、
　やっぱりそれを堰き止めたのは、松田の眼差しだった。
「オレん家に泊まればいいだろ！決めつけなくても、他にも、選択肢は、ある」
「あんたが良くても、あんたの家族はどうするのよ!?知らない女連れてきて……一日二日なら同情できても、記憶が戻らなかったら結局追い出すしかないじゃない！」
「親父とお袋に土下座する！」
　私への、執着。
「夕麻ちゃんを住まわせてくれるように。それでもだめなら、お宝グッズ売って金も作る。夕麻ちゃんのためなら、何でもする！だって

オレは……オレはただ……」
「――ほら、そういうわけなのよ、桐生ちゃん？コレがどうしてもって言うから、もう約束もしちゃってるの。アンタが私をどれだけ怪しんでも、ね」
それだけで十分なのだ。
私は負の余波を嘲りの微笑の中に隠し、羽織った上着を身に寄せなおした。憤りとも諦めともつかない何とも微妙な表情をする桐生を見る。それから、松田へ向き直った。
熱い、熱のこもった眼差しに、私はお望み通りの笑顔を見舞った。
「話は終わりでしょ？なら松田、さっさと行きましょ。アンタの家で、さっきの台詞をもう一回。ああでも、早く終わらせてね。いい加減、寒さに耐えるのも限界だわ」
わざとらしく身震いしてみせる。急かされた松田は面食らったみたいな顔をして生返事を返すと、すぐ我に返って私の手を引き始めた。目の当たりにした桐生も、二人だけとか問答無用で疑われるでしょ！、などと理由をつけて追ってくる。私を監視したくてしょうがないらしい。
けれどもはや、私にはどうでもよかった。
手のひらに温もりを感じながら、私たちは葉擦れが鳴る公園を出た。

中編

「……あのクソ店長め……何が『キミの接客はうちの店にそぐわない』よ。この私が働いてやってるってのに、あっさり切り捨てるなんて……そんなの、どれだけの損失になると……」

口の中に漏れる恨み言と不機嫌を持て余しながら、私は夕暮れに差し掛かる街並みを歩いていた。

じんわり染みる夕日と初夏の空気で汗ばむ手の中、つい数十分前に有無を言わさず握らされた手当の茶封筒が、呪詛の余波でくしゃりと潰される。それなりに硬い感触に喉が鳴るも、勝った苛立ちによって乱暴にポシェットの中へ押し込められた。

すれ違う通行人の幾らかから怪訝そうな眼を向けられていることにも構わず、私は盛大に鼻を鳴らした。

「大体、私はただのバイトなのよ？安い給料でこき使ってるくせに責任だのなんだの……なのに自分はクレーマーに媚び売るばっかりだし……ああもう、潰れればいいのよあんな店！」

苦労して見つけたバイト先からの、唐突且つ一方的なクビ宣告。

雑踏のざわめきにも響くくらい、人目も憚らず不平不満をぶちまけた。それでも尚その怒りが治まらないのは、不安が中心に重く居座っているからだった。

これから松田家に奉ずるお金はどうしよう、という。

「……嫌になるわ」

茜色に色付く空を見上げた。

松田と出会い、己が記憶喪失であると知ったあの夜から、もう数ヶ月が経過した。未だに私の記憶も身元も、全く明らかになっていない。

頼みの警察は私の痕跡すら見つけることができず、失踪届も捜索届も掠りすらしなかった。めでたくも、私は桐生が言うところの、一人ではまともに生きていけない状態に合致してしまったのである。

家族も知り合いもいない、天涯孤独の身上。お金も、持ち物すら碌にない、行き詰まった状況。

私は、恐らく傍から見ればそんな危機的状況の中、季節もが移り変わった今日に至るまで夕麻として生きてきた。実際、松田に会うことがなければ、本当に最底辺へ堕ちていただろう。

しかし運のいいことに、私には寄る辺があった。松田家に身を置くことを許されたのだ。故に、身体の安売りなんかをせずに済んでいる。

これほど都合のいい結果になると、当初は思っていなかった。

土下座してでも夕麻ちゃんを泊めてくれるよう頼む、と豪語する松田に続いて彼の家へ向かったあの時、表面上は余裕を崩さなかったものの、やはり頭の中では桐生の言葉が反響していた。まともな人間であれば、素性の知れぬ女などを家にあげ、まして泊めようとは思わない。息子の嘆願があろうがなかろうが、いやむしろあればこそ、警戒心は増すはずだ。だからせめて数日だけでもと、内心では靴を舐めるくらいの覚悟を固めてさえいた。

のだが、思っていた以上に松田の両親はいい人だった。

ドアを開けるなり土下座した息子に戸惑う間もなく、私の境遇を説明されたお母様とお父様。私と、ついでに桐生も続いて頭を下げれば、まず最初にお母様が同情で陥落した。いつまででも居てくれていい、なんて涙ながらに抱きしめられてしまって、さらには肩越しにお父様が男泣きし始めれば、伝染は止められない。結果的にその場の全員で涙の合唱会をする羽目になったことは、まあぎりぎり美談と評していいだろう。

ともかく、松田の覚悟も関係なく、むしろ請われるくらいの調子で滞在を認められた私は厚意に甘えることに決め、以来そのまま居候を続けていた。

だが、その同情が永遠に続くわけもない。戸籍なんかの必要なアレコレを揃えた後も松田家を出る気になれない、なんてことになってしまえば尚のこと。堂々と出て行かない宣言をするわけにいかず、目減りしていく最初の厚意を維持したくとも、哀れで健気な記憶喪失の娘を演じるだけでは厳しいものがある。彼らにいくら媚を売ろうが、それは家のお手伝いの域を出ないからだ。

松田のように、ヤる話がいつの間にか立ち消えても変わらないほど強烈な執着を私の身体に感じてくれればいいのだが、お母様もお父様もその手管は望み薄である上、あまりにも節操なしだと当の松田の心象にも悪影響が出てしまう。もはや彼の心象と居候の許可はさしたる関係性を持たないが、とにかく手持ちのそれらでは駄目だった。必要なのは目に見えない印象などではなく、はっきりした実物、実利。明確に、私の価値を示す必要があった。

つまるところ、その最も適当なものが、お金だったのだ。

だからこそ稼ぐ手段がなくなった今、強い不安と怒りが脳内に舞っている。事情が事情だ。学歴も何も、履歴書に書けることがほとんどない私には、見た目年齢が若すぎることも相俟って、新しい仕事を見つけることが難しい。蓄えも心もとなく、クビになったことを誤魔化すにしても無謀と言える。同情の貯蓄が底を突いてしまう可能性は、到底無視できるものではなかった。

どうにかせねば。あの家を追い出されるわけにはいかない。

脳裏に描いた危機感を以てして、私は己の思考から、邪魔となる焦りをどうにか押し出すことに成功した。生暖かい街の空気で深呼吸し、ふと思い立ってスマホを取り出した。

「……いつもなら、まだまだ働いてる時間よね……」

むしろ今頃がかき入れ時であったはずだ。本来の帰宅時間はまだ遠く、それまでの間が空いたとなれば、ちょっとした遠出をしても気取られはしないだろう。

数十分待ちが常となっている人気の洋菓子店にも入れるかもしれない。

ひとまずはそれをお金の代わりのご機嫌取りとすることにしよう。ポシェットの奥で潰れる茶封筒を一瞥してから、私はスマホの地図アプリを立ち上げた。駒王というこの地方都市、過ごす内に大体の道は覚えたが、縁の薄いお店の位置を諳んじられるほどではない。

だからスマホは必需品。必要な出費だったのだ。手に取るたびに思い出すあの金額と、それを肩代わりしようとするお母様との大激闘に思いをはせながら、私は、旧世代故に鈍間なそれの発熱を待った。

すると突然、男の声が夕方の日差しを貫いた。
「あっ……」
意味をなさないうめき声。というよりはほとんど鳴き声に当たる一音は、私の後頭部にぶつけられたようだった。しかし、その声色に聞き覚えはない。一瞬、後悔したクソ店長が私を呼び戻しに来たのではないか、などという期待をしてしまった自分に閉口し、私はスマホに落としていた視線を少しだけ上に持ち上げた。
視界に入ったカーブミラーには、茶髪の男が映っていた。松田と同じ駒王学園の制服に身を包んだ男子学生。顔は悪くないが、しかし特別良くもないそいつが、魚みたいに口をぱくぱく喘がせて、私の後姿を凝視していた。
ため息が出た。
ここまでの重度はなかなかいないが、その信じられないモノを見る眼は、まあ幾度となく受けたそれと同じものだ。
(美少女すぎるのも、考えものね)
顔が良ければ身体も良い。となれば当然、私は後姿も美しいのだ。女に飢えたけだもの共の眼についてしまうのは、仕方ない。
――そして、これだけ人の目を惹くことができる私を、あのクソ店長はクビにしやがったのである。
(……思い出したらまたイライラしてきたわ)
クレーマーに媚びへつらい、集客にて他の追随を許さない有用性を誇る私を切り捨てたクソ店長。よくよく考えれば、それを止めなかった同僚の女共も大概だ。私の美しさに嫉妬していたのだろうが、しかし変わらない。結局、あの店そのものがクソだったということだ。
やめて正解だった。同時に、頼まれても絶対復帰してやらないことを固く心に誓い、私はようやく起動した地図と照らして脚を動かした。後頭部から踵に至るまで、行ったり来たりに舐める茶髪男の視線を、右に曲がって切り捨てた。
少し行くと、すぐ大通りに出た。買い物帰りに仕事帰り、お疲れ顔で住宅街の方へ歩いていく人々の流れを縫い、遡って洋菓子店を目指す。地図アプリによれば到着予定は数十分後だが、この逆流ではもう

少しかかりそうだ。
体力も大分持っていかれるだろう。ここまでして売り切れなどしていたら悲惨だな、などという想像の陰鬱を憂いつつ進んでいると、不意に人の密度が薄れ、周囲が開けた。
赤信号が絶ち切った跡だ。まばらになった人ごみの末に信号待ちらしき集団を見つけ、立ち止まって息を吐く。
疲労で深くなったそれを、たぶん聞かれたのだろう。またしても背後から、今度は聞き覚えのある女の声がニヤニヤと私の肩を叩いた。
「夕麻、あんたこの時間はまだバイトしてるんじゃなかった？」
「桐生……」
なんでこんなところにいるのか。
疲れと混ざって、振り向いた私の表情は大層苦々しげなものだったに違いない。しかし、このところどうにも顔を合わせる機会が多い桐生は、慣れてしまったのか全く怯む様子もなく、人を小ばかにしたようなにやけ顔を継続して言った。
「今日は金曜でしょ？今度のお店は固定制のはずだし、お休み取った？それとも――」
眼鏡を押し上げる、腹立たしい仕草。
「またクビにでもなったの？」
苦々しげどころではなく、たぶん青筋の一、二本が確実にこめかみに浮いた。
「うっさい！アンタには関係ないでしょ！ていうか、なんで私のバイト先のこと知ってんのよ！」
「あー、やっぱりそうなわけ。これで五度目？どうせまた『ゴミカス』だの『死ね』だの言ったんでしょ。全然懲りてないじゃん」
「客がクソで店長がクソで同僚がクソなのが悪いのよ!!」
だって我慢ならないのだ。言うまいと笑顔を保っていても、軽く見られることが、自分でも不思議なほど受け入れがたい。
思わず口をついてしまって、その度クビの憂き目にあっている。桐生からの屈辱も加わりより硬くなった自戒の決心は、これまでとは比べ物にならないほど高まっていた。……三回目も四回目も、同じこと

を思っていたような気はするが。
「……ほんとにブラックなとこ入っちゃったら警察沙汰起こしそうよね、あんた。やっぱり普通のアルバイトは向いてないのよ。こないだ言った秋葉原の店、紹介する？」
「いらないに決まってるでしょ！そんな下賤な……。今、私は機嫌が悪いのよ。見てわからない？揶揄うために呼び止めたなら、もう失礼するわ。お母様とお父様のご機嫌伺いに新しい仕事探しに、やることが山積みなのよ」
　吐き捨てるように告げ、同時に青信号で動き始めた人波に続いて鼻を鳴らした。輻射熱を振りまくアスファルトを跨ぎ、早足に白線を三本ほど超える。けれど、一向に背後に付く気配は振り切れなかった。
「いっそバイトしない方が、色々といいと思うけどね。私は」
　とことんまで私を愚弄する気らしい。横断歩道を渡り切るまでは我慢したが、呑み込むことはできなかった。
　今度こそ気なんて遣わずにひっぱたいてやる、くらいの苛立ちで、私は大きく息を吸った。が、それは発揮される前に困惑に呑まれ、ただの呼吸に変わることとなる。
　先の態度と打って変わって、謝るみたいに桐生が言った。
「私なりに調べてみたんだけどさ、あんたの過去のこと、何もわからなかった」
　振り返って、眉尻の下がったその表情を眼にしたまま、数秒固まる。怒気を引っ掻き回された私は何を言おうか散々迷い、結局、ごく短い三音のみを捻り出した。
「なんで……？」
「……意地張るのも、いい加減にしないとと思ってさ」
　桐生も少々ためらいを見せてから、自嘲するかのようにそう口にした。
　道の真ん中で立ち止まった私たち二人を、訝しげな眼が横を避けて通る。意味をかみ砕き、理解しようと眉を寄せる私は、決意して桐生の手を取り、人の流れの中に戻った。
「意地って……そんな顔されても困るわよ。あんたが私を嫌う、てい

うか疑うのは、私が言うのもなんだけど、そうおかしなことじゃ――」
「それもね」
遮り、再度私の足を止める桐生。杭になった彼女に引っ張られ、波の外、細い街路樹の陰に寄る。
二人で淀んだそこで、桐生は深呼吸してから続けた。
「最初は、そりゃあ本気だったよ。あんたは何か企んでて、だから松田に拘ってるんだって。それを明かして追い出してやろう、なんて思ってたのもそう。でもすぐわかったのよ。あんたは、夕麻はまあ、いい奴じゃないけど……嘘つきじゃないって」
苦笑して、桐生は街路樹を掴んでいた手を離す。
「だって、文句言いながら必死にバイトして、稼いだお金を押し付けてくる美人局なんて、そんなのありえないじゃん？それをすぐ近くで見てる松田のご両親も、あんたを信頼してるのはわかるし。だから、私も……あんただったら、別に良いかなって……」
「……」
私は黙って、変な具合に歪み始めた桐生を見守った。
ゆっくり、呑み下すように、頭が下がる。
「つまり……ごめん。あの時、あんたを追い詰めて」
動揺しないわけがない。
どう贔屓目に見ても良好とはいえない私たちの仲。初めて出会った時から嫌い合っているのだから、当然私は憎まれ口以外を利いたことはないし、聞いたこともない。それが最早、普通だった。
だから初めて目にしたその光景、桐生の殊勝な態度は、違和感どころか悪寒すらも私にもたらし、後退りをさせた。そんな己に内心で舌打ちし、ガードレールの縁に腰かけてから、息を吸う。
「だから、謝られても困るんだっての。謝ってほしいなんて思ったこともないし……認めたら、私まで謝らないといけないじゃない。嫌よ私、あんたに頭を下げるなんて、そんな屈辱……」
「ごめん」
言ってやるも、桐生は一向に平謝りをやめない。押しつけがましい誠意は徐々に周囲の注目をも集め、私の良心をキリキリ締め付けた。

そうなればもう、負けは決定付けられたようなものだ。
我慢比べを諦め折れた私は、せめてもの抵抗に不機嫌の顔を作り、不承不承で首を傾けた。
「……わかったわよ。許すわよそのことは。もう私は、あんたにイジメられたことを気にしていません。ほら、これでいいんでしょ？」
ようやく、桐生が頭を上げる気配。しかし眼が合う前に、私は彼女から顔を背けた。赦しを告げるよりもはるかに重い口を、苦労してこじ開ける。
「私も……あんたの気持ちを煽って、楽しんでたとこがあったから……悪かったわ……」
攻撃に、対話ではなく反撃を選んだ私にも、幾分かの責がある。内心のそれは、いよいよ認められることとなった。
不服ではあるが、桐生の誠意の手前、致し方ないだろう。こんなつまらないことで悪者になるのは勘弁だ。それに、どうせ大した意味はない。
釈然としない胸中を巡る敗北に、ため息を吐いた。次の瞬間、
「――んでさ、夕麻っち」
思い悩んで苦しんだことがバカバカしくなるような、そんな呼び方が、明るさを取り戻した桐生の口から飛び出した。
「松田の御両親にも、私、引っ掻き回して迷惑かけてたわけじゃない？そのことも謝ろうと思って、手土産も買ってきたんだけど……今から家行っていい？」
その突然のあだ名呼びと、感情変化の激しさは何なのだ。あっけに取られて声に出ない指摘が脳内を飛び、次いで我知らずに桐生へ戻っていた視線が、片手のそれを見る。
見せつけられたその手土産、両手サイズの白い箱には、私が求めた人気洋菓子店のロゴが刻まれていた。
「……もちろん、松田の分も夕麻っちの分もあるけど？」
私の絶句を、桐生の思い違いが通過する。
赤くなっていた信号がまた青に戻るくらいの時間をかけて現実を頭に回した私は、不審から心配に眼を変えた桐生が口を開く前に、そ

の手を乱暴につかんで人の流れに飛び込んだ。
せっかく渡った横断歩道を逆戻りしながら、混乱する桐生に非難がましい眼を送る。
「アポなら私じゃなくて、松田に取りなさいよ」
クラスメイトだろうに。
そもそも私が承知したとて何の意味があるのか。
思考回路を理解しきれない。やはりこいつとの仲良しこよしは中々に困難であると再確認して、私は桐生と共に帰路を急いだ。

松田家にたどり着く頃には、日はだいぶ落ちていた。
はるか遠く、山の峰に太陽が差し掛かり、赤い線を引くくらい。隣を陣取る桐生と、『転校してきた女子二人が嫌に揶揄いやすくて楽しい』だの、『私が居候してから松田の変態性が成りを潜めたとお母様に喜ばれた』だの、適当とはいえ雑談を交わしながらの道中であったために、気付いた時には体感時間と目に痛い西日が一致していなかったが、ともあれ私たちは帰り着き、ちょうど庭に出ていたお母様と対面した。
桐生の同行を不思議がりつつ、早上がりだったのねと、私の帰宅時間には納得してくれたお母様。ぎっしり詰め込まれた保冷剤でまだ冷気が漂う手土産を差し出す桐生の様子に何かを悟り、家に招き入れたのは、その微笑が故だった。
そしてリビングにて、麦茶を片手に桐生の懺悔を聞いた彼女は、やっぱり優しげに首を振った。
「私もあの人も、藍華ちゃんを迷惑だなんて思っていないわ。私たち家族を心配してくれたんでしょう？そのくらいのことは、皆知ってる。それに――」
桐生に注がれていた眼が一瞬私を見て、そして戻る。
「夕麻が悪い子じゃないってことは、わかってくれたんでしょう？なら一層のこと、嫌いになる要素なんてないわ。ね？」
「まあ、それは……そうです」

言い淀む桐生は、お母様と同じくちらりと私を見やって首肯した。しかしそれは中途半端で、眼も微笑ではなく不服そうに歪んでいる。どうせ『夕麻が悪い子じゃない』に引っ掛かったのだろう。揚げ足取りめ。少々イラっと来た。

（こっちに注目向けさせないでよ。アンタのせいでクビの言い訳できなくなったんだから！）

どこからボロが出るかなんてわからない。そんな警戒をやめるのは明日か明後日か、少なくとも、ご機嫌取りの思惑を潰された今日の内はクビになった事実を隠し通すつもりである私は、話を振られる前に麦茶のグラスに口を付けた。氷が崩れ、カランと鳴った。

「……でも、それでも私は、謝りたいんです。あの時、夕麻っちの身元くらい、私みたいな素人でもすぐ見つけられるって……言ってしまったことには、責任を取らないと」

「それは……仕方がないじゃない。警察にもわからないんだから、藍華ちゃんが気負うことは――」

「違うんです。見つけられなかったことは、もちろん心苦しいんですけど……それより、すぐ見つかるなんて希望を持たせて、それを裏切ってしまったことを謝りたいんです。夕麻っちも松田家の皆さんも、いらないストレスで苦しめてしまったから……」

「私たちは……そんな……」

お母様とお父様と、それから松田も、そんなことは気にしていない。だが当事者である私は？

優しいからこそ、言い切ることができないのだ。

だから私は、半分ほども飲み干してしまったグラスを置き、お母様のそれをそっくりマネした笑顔を作ることができた。

「そうですよ、桐生さん。私だって気にしてません」

桐生が僅かに目を見張った。自制の心を漏れた驚きのそれは、まず間違いなく私の猫なで声のせい。けれど構わず、彼女と話す時より数段高い声で、場を丸く収める言葉を並べ続けた。

「それに、この頃は記憶を取り戻したいとか、そういうこともあまり思わなくなってるんです。皆さんこんな私受け入れてくれて、よくして

くれますし……今は居候ですけど、このままバイトを続けていけば、いずれ一人立ちして恩返しもできますから」
欠片も思い入れのない、一向に思い出せない過去になど興味はなく、支障がない以上必要もない。たぶん、それが判明したとしても、私は今の生活をやめたいとは思わないだろう。思い出したくもない、とすら考えるかもしれない。
適当な理由付けと共に不快な妄想を打ち切って、私は笑みを深くした。
するとやはり、優しいお母様は少し怒ったような顔をした。
「もう、またそんなことを言って……。恩返しなんて、そんなこと考えなくていいのよ。そうでなくても夕麻には随分助けてもらっているし……ほら、うちのバカ息子、最近はだいぶまともになってきたけど、それでもお手伝いの一つもしてくれたことがないのよ?だから、そんなのは関係ないの。私はあなたが大好きよ?頑固なのが玉に瑕だけど」
お金の問答を思い出すも、優しさの言葉はそのままの笑顔で受けとめる。連続攻撃で何故か頭を撫でられるがどうにか耐え切り、お母様の困り顔が離れていつもの明るい微笑に変えられるさまを見つめた。
「とにかく、夕麻と藍華ちゃんが仲良くなってくれてうれしいわ。せっかくおいしそうなケーキもいただいたことだし、和解の記念にみんなでいただきましょうか。藍華ちゃんも、おやつの時間にはもう遅いけれど……ケーキの分のお腹は空いてる?」
「え……えっと、もしかして私も食べるんですか?でもケーキ、四つしか買ってこなくて……」
「いいのよ、男連中の分もこっそり食べちゃいましょ。この間、取っておいたお饅頭を勝手に食べられた仕返しだから」
慌てて断ろうとする桐生だが、笑顔のお母様は引かない。私を頑固と言うお母様だが、その実、当人も中々だ。その内桐生も陥落するだろう。
松田はどうでもいいがお父様には心の中で謝っておくことにして、見越した私は楽しそうにじゃれ合う二人をよそに椅子を立ち、飲み干

したグラスを手に取った。
二人のそれも回収し、言う。
「それじゃあ私、お茶とお皿を持ってきますね。ペットボトルのですけど、紅茶があったはずです」
「……うん、お願い、夕麻。さすがに、ケーキに麦茶は合わないわよねぇ。藍華ちゃんも紅茶でいい？」
「あ、はい……ありがとう、ございます」
歯切れの悪い桐生に適当な会釈をして、私はリビングのドアノブを回した。
片手のお盆にグラスを乗せたまま、後ろ手に閉める。廊下に出てドア越しに二人の賑やかな声を確認すると、気が抜けた両肩から盛大なため息が飛び出した。
はあああぁぁぁ、と。
（ああ、疲れた）
松田家のキッチンは、リビングから少々離れた場所に位置する。とはいえ精々、五、六歩程度でたどり着くが、それでも今はその距離が十分ありがたい。かなりの精神力を要する、桐生の面前での猫かぶり。ここからさらにお茶会までこなすとなると、さすがに覚悟の必要があった。
それを固めるための間。単に息苦しさから逃れたかったという思いも無きにしも非ずだが、とにかく私は桐生を生贄にシンクへ到着した。無駄に丁寧にグラスを洗い、無駄に形のいい氷を厳選してグラスに投入し、無駄に冷蔵庫の上の段から紅茶を探し始める。やっぱり一番下の段に佇んでいた二リットルを引っ張り上げ、わかりきっている賞味期限を調べてからグラスに注いだ。
一ミリの狂いもなく同量にしてやろうと、手段と目的が入れ替わり、そして三杯分が完了した。その直後。
「かーちゃん、ただいまー」
疲れた松田の声が玄関のドアを開いた。
ちらりと一瞬、タイマー代わりに置かれた電子時計へ眼をやる。下校時刻と同時に飛び出し、ケーキを買いに走ったという桐生と違い、

最近気になっているらしい写真部の活動でもあったのだろう。かなり遅い。
もう少しで残照と化しそうな夕日を窓の色に感じつつ、私は皿とフォークと紅茶入りのグラスをお盆に乗せ、食器棚を漁りながら応えた。
「お帰り。めんどくさいときに帰ってくるのね」
「お、う……ただいま、夕麻ちゃん。めんどくさいって、なんのことだよ？」
驚きの声にも疑問の声にも元気がない。それどころか、何か別事を思い悩んでいるような覇気のなさは、どうやら単に疲れただけではないようだ。
四杯目の紅茶を準備しながら、私は松田を嗤ってやる。
「またお友達に弄られたの？」
息を呑む松田の気配にほくそ笑んだ。
「覗き友達、確か一誠に、元浜だっけ？自業自得でしょ。誘い断るのに、『彼女ができたから』、なんて言っちゃうんだから」
十中八九童貞で、且つ彼女いない歴＝年齢であろう変態三人組。その中に突如彼女持ちが現れればどうなるか。想像するまでもなく、ヘイトが募るに決まっている。
変態とつるまない（まともである）ためにはそれでいいのかもしれないが、しかしほんの少しだけ可哀そうだ。八分目の水面に氷を落とし、透明なオレンジの雫を跳ねさせてから、私は大分重くなったお盆を持ち上げた。
「しかもその彼女ってのが私なんでしょ？断りなく理由にした天罰よ。ざまあないわ」
「そのこと、なんだけどさ」
反論でもなく、背を叩いたのは躊躇の色。振り返った先に見た松田の悩ましげな顔が、一拍の逡巡を呑み込んでおずおずと続けた。
「夕麻ちゃん、これからちょっと……時間ある？」
「……はぁ？」
それを怯えながら訊くのか。
込めた眼光は松田の背をビクリと伸ばした。奴は鞄を取り落とし、

大慌てで視線を泳がす。
「ああいや……そ、そうか、バイトがあるんだっけ。ごめんオレ、ド忘れしちまったみたいで……」
「……クビになったわよ、ついさっき」
右往左往が固まって、その額に汗が垂れた。
「自分でお母様に報告するから、告げ口すんじゃないわよ」
「そ、そりゃあ、わかった。で、だよ。つまり夕麻ちゃん、今日はもうやることがないってことだよな……？」
「……そうよ。お母様次第だけど」
重なり、実に屈辱的だが、頷く。ますます縮こまって、松田は上目遣いに私を見た。純粋にキモい。
「じゃあその……よかったら、今からちょっと、外に付き合ってくれない……でしょうか……？」
相変わらず恐る恐る、松田は私の顔色をうかがいながら、その仔細を口にする。
「実はさっき、帰り道で一誠に会ったんだけどさ、すごい剣幕で言われたんだよ、『今すぐお前の彼女に会わせろ』って。今までは嘘だってんで興味なしだったのに、急に名前まで知りたがるし……いや、もちろん隠し通したけどよ……何の事情か知らないけど、ただ顔を確かめたいだけって必死なもんだから……その……つい……」
「……オーケーしちゃったと」
「……そうです」
松田はもごもご頷いた。なるほど、この恐る恐るはそういう理由であったわけだ。
多少のフレストレーションを融かされた私は、思考を実利的な方面へ移行する。すなわち、このお誘いをどうするか。
すぐ一つだけ杞憂を見出し、紅茶の淡い色に眼を落したまま、尋ねた。
「その一誠ってのは、私が記憶喪失なことも、この家に居候してることも、知らないのよね？」
「あ、当たり前だろ？……そんなデリケートなこと、言いふらしたりな

んてしねえよ」
　となればたぶん、一誠とやらの要件は口出し手出しの類ではないはずだ。以前の桐生みたいに騒がれるのでなければ、問題はないだろう。
　だからきっと嫌がらせに違いない。ソイツは一人でやってきた松田を笑ってやる心積もりなのだ。
　そのことは、松田が恥をかく分にはどうでもいいが――
「……ホントにバカね」
　できうる限りの不満を眉間の皺に乗せ、長々とため息をついてみせる。威圧が染みて、期待と失望の狭間にて顔を持ち上げた松田に、私はさらなる追い打ちをかけた。
「アンタのお願いってつまり、私に彼女のふりをしてほしいってことでしょ？それもつまんない面子のために。極めつけに事後承諾だし、普通そんなの誰も承知しないわよ。……まあでも――」
　希望を持たせてからわかりやすく突き落とし、その後また掬い上げる。この表情がたまらない。
　片頬が上がった。
「いいわよ、今回は。アンタがまたエロ猿に戻って、それでお母様からの信頼が崩れたら大変だもの」
「……そうなっても、かーちゃんが怒るのはオレだけだと思うけどなぁ」
　感情の乱高下の後、最終的に呆れたふうな顔に着地した松田を見るに、最後の一言は余計だったらしい。手からすり抜けた目当ての反応を悔やみ、逆立った気分が腕に伝わり紅茶グラスの氷を鳴らした。清涼な輪唱にお盆の重さを思い出し、しっかり持ち直してキッチンと、松田の眼前を出る。
　鼻で笑って、背中越しに言ってやった。
「確かに、怒られはしないでしょうね。でも、いい？アンタが女の尻を追っかけなくなったのは、お母様の中では私の功績なの。夕麻のおかげで、ってね。だからそれが元に戻ったってなると――」
　がちゃり。目の前で回ったドアノブ。辛うじてそれが開く前に、私

は気ままな己の口を閉ざすことに成功した。一歩引いて内開きのそれを避けると、現れたお母様が「ああ、ごめんなさい」と驚いて口を覆う。が、少女みたいな仕草は、私の後ろに松田を見つけ、母親のそれになった。
「お茶に随分かかるなって思ったら……はあ、帰ってきてたわけね。間が悪いったらないわ、バカ息子」
「久しぶりに聞いたぜ、かーちゃんの『バカ息子』……。ていうか、夕麻ちゃんもそうだけど、『間が悪い』って何だよ。紅茶もそうだし……内緒で何かいいもんでも食ってんの？」
「ご明察」
　称賛は私でもお母様でもなく、桐生から送られた。虚を突かれた松田は眉を顰め、ドアとお母様の隙間にその姿と、口の開けられたケーキ箱を見つけて唖然とする。
　退いて道を開けてくれたお母様へにこやかな笑顔を送り、お盆の上の色々を配膳しながら、私はそのやり取りを聞いていた。
「な、なんで桐生がうちでくつろいでんだよ!?」
「そんなに驚くこと？ああ、女の子が自分の家に来て、緊張しちゃってるわけね。……冗談よ。謝りに来ただけ。夕麻っち関連で色々暴走しちゃったことをさ」
「それでちょうど和解も済んで、藍華ちゃんが持ってきてくれたケーキでお祝いしようと思ってたところなのよ。おいしいお店のケーキ、せっかくあんたとお父さんの分も食べれると思ったのに……」
「かーちゃん今ひでぇこと言ったな!?今まで色々やったのは認めるけど、最近は真面目にしてただろ!?」
「だってお母さんのお饅頭勝手に食べたし」
「それかよ！だからあれは、オレもとーちゃんも知らなくて……そ、それにオレはとーちゃんから渡されたのを食っただけだし……」
「……お父さん売るんだ」
「う、売ったんじゃねぇよ、事実を言っただけだ！でも、もう聞いちまったぞ!?オレは食ってもいいよな!?」
「仕方ないわねぇ……、夕麻もお皿四人分用意してくれたし」

「やったぜ！夕麻ちゃんありがとう！……って、ああ、そうだ」
桐生の手伝いもあってちょうどお皿にケーキを乗せ終わったころ、松田がそう切り出した。
「かーちゃん、ちょっと夕麻ちゃんと外に出てきてもいいか？一時間もかからないと思うんだけど」
お盆を抱いて、私はにこにこ笑顔をお母様に見せる。懐疑と心配とが入り混じった表情で、お母様は返した。
「外って、今から？夕麻もそのつもりなの？」
「はい。彼にとって大切なことらしいので」
暗にそういうことではないと告げたそれは正しく伝わった。ほっとしたような複雑なような、そんな感情を共有するお母様は、いかにも仕方なしにため息を吐いた。
「じゃあ、ケーキはとっておくわね。すぐ暗くなるだろうから、気を付けるのよ？」
「大丈夫ですよ、お母様。何かあっても彼が守ってくれますから」
「何でもするって言ってたもんね」
桐生との合わせ技は万全に効果を発揮し、松田の顔を夕日の赤色に染めた。それでごく小さくなってしまった声がごにょごにょ何かを呟き、靴をつっかけてドアを押す。私も続き、逃げるようにしてお母様と桐生に背を向けた。

連れてこられたのはいつかの公園だった。沈んだ日が空気に薄闇を垂らし、それを眼にした母親の集団が、遊び疲れた幼子を抱えて帰り支度を始めている。覚えのある電灯がちょうど灯り、その安らかな寝顔を照らした。
ベンチに座ってそれをぼんやり見つめていると、不思議な、感慨に似た感情の揺らぎが脳に昇った。
（家族、か……）
記憶を失う前の自分に未練がないというのは本心だ。身分証でも落ちてないかと、桐生に引っ張られて再訪した時も、この場所に忌諱

なんかの隔意を抱くことはなかった。
けれど今は、少し心がざわついた。考えて、それに忌避を感じてしまう。桐生のせいだ。ため息が出た。
居心地悪く、すり減ったひじ掛けをさすっていると、ようやく二人分の足音が後方から近付いてきた。
「お待たせ夕麻ちゃん。やっと一誠の野郎見つけたよ。言ってた通り、ほんとに木の後ろなんかに隠れてやがってさあ……」
やっぱりそう。呼び出して先回りし、一人言い訳を考えやきもきする松田の姿を堪能したかったのだろう。
やってきた待ち合わせ場所に一誠の姿が見えないことを訝しんだ松田へ、教えてやった『かもしれない』、というか私だったらそうするだろうという予想は、見事的中していたらしい。つまり、松田がろくでもないエロ猿であった頃からの友達である一誠は、負けず劣らずのろくでなしであったことが明らかとなったわけだ。
そして私は、今からそのろくでなしに対して愛嬌を振りまいてやらねばならない。松田の彼女を装うことはまだしも、バイトで五度目の失敗をしたばかりの身では、面倒くささもそうだがそれ以上に不安が大きい。
心の中だけで深呼吸してから、私は立ち上がって振り向いた。そのままおしとやかに頭を下げ、貼り付けた定型文の挨拶を口にした。
「初めまして一誠さん。聞いていると思うけど、私、松田くんの彼女の夕麻って言います。よろしくお願いしますね」
我ながら完璧な自己紹介。男受けする女の子、一歩後ろを歩く大和撫子的清純さを前面に押し出した声色と仕草は、私の目指した通りに響いて纏まった。兵藤一誠とやらから好印象を得たと、そう確信した。
顔を上げる。
瞬間、私渾身のにっこり笑顔は、眼前のその眼に引きつった。
「やっぱり、お前か」
どこかで見たことがある茶髪。クビを言い渡されてイライラしていた時に見つけた、あの男だ。

しかしそのことを思い出したのはずっと後だった。私は、彼から向けられる理由のわからない敵意と嫌悪に面食らい、反応すらできないでいた。
「『やっぱり』？……一誠お前、夕麻ちゃんのこと、知ってるのか……？」
また怯えるみたいに聞こえた松田の声もが、意識に入らない。だって、本物だと確信したのだ。向けられたその敵意と嫌悪と、はち切れんばかりの害意が。
笑顔を保つことなどできようもない。竦んで、身体も動かなかった。首元を鋭利な爪で掴まれているような、ほんの少しの刺激で容易に弾けて殺されてしまいそうな悪寒が、私の全身を凍り付かせていた。
そんな尋常ならざる眼は、背後で閃いた赤い光と共に、その数を増した。
「どうやら本当に、イッセーの見間違いじゃなかったみたいね」
「そのようですわね。うふふ、どうやって部長の魔力から逃れたんでしょう。ちょっとお尋ねしてみたいですわぁ」
「……わかっていると思いますけど、駄目ですよ？朱乃さん。いくらはぐれ同然とはいえ、和平が結ばれたばかりなんですから」
「そうです。捕まえて、アザゼル先生に引き渡す手はずです」
女と、女と、男と、女。理解できたのはそれだけだ。「冗談よぉ」なんて間延びした声も含め、言っていることはさっぱりわからない。
（逃げた？和平？アザゼル先生？）
突き刺さる眼のその色も、何もかも理解ができない。
松田の声が、私の意識をそっちに向けた。
「あ、あれ……？リアス・グレモリー先輩に姫島朱乃先輩に、木場に小猫ちゃんに……なんで……み、見間違い……？いま、魔法陣みたいなのから、ズズズって……」
「……松田君ね。ごめんなさい、気付くのが遅れて。でも、無事でよかったわ」
赤髪の女が私の眼の端を横切った。松田に近付く後姿。持ち上が

り、ちらりと見えた手のひらに、何か、幾何学模様のホログラムのようなものが――
「や、やめ――ッ!!」
突如感じた、形容しがたいほど強烈な嫌な予感は、同時に背後から両腕を押さえられ、手が出なかった。
止められない。
するりと抜けた赤髪の魔法陣が、唖然とする松田の額に触れた。
「――ぁ」
一際強い光を放ち、そして消える。心臓が捩り上げられ酷く痛んだが、碌に意識に昇らない。魂が抜けたみたいにぼんやり虚空を見上げる松田へ、淡々と掛ける赤髪の声を、私は何もできずに唯々聞いた。
「この女と、ここで見たことはすべて忘れて、家に帰りなさい」
胸を突き抜け、弾け飛んだかと思った。
「……ああ……おう、わかった……」
呆然自失に唯々諾々と松田は頷き、そして私に背を向けた。
己の目玉に映ったそれが信じられない。
のろのろと、松田は公園の出口へ向かっている。見慣れた背中がとても遠くを歩き、どんどん離れていく。置いて行かれている。
彼の眼が――私を、見ていない。
私の声帯は、その時ようやく声を張り上げた。
「――松田!!ちょっとアンタ、私を置いてどこ行くのよ!!なんでこいつらの言いなりになってるのよ!!松田!!松田ッッッ!!!」
「無駄よ」
冷たい声に振り向く。軽蔑しきった赤髪の目に、迷子みたいな顔の私が映っていた。
「どんな手を使ったのか知らないけれど、私が掛けた魔力の暗示はそんなことじゃ解けないわ。それに辺りには結界も張ってある。諦めなさい、もう終わりよ」
やっぱり、その意味はまるで理解できない。頭のおかしな連中の相手など時間の無駄だ。
だが今は、それにすら縋りたかった。

「アンタ……アンタなの……？……ッ！アンタが松田におかしな――ッあぐ……!?」
掴まれた腕を払い、易々振り切れたそれに違和感を感じながらも、恐れに突き動かされて詰め寄った。が、一歩と進まぬうちに足が縺れて身体が傾く。さらに気付けば背にまとめられて腕も動かず、私はそのまま地面に身体を打ち据えた。
小石でもあったのか、頬に一筋灼熱を感じた。耐え、何とか身を捩って見上げると、気付く。視界に入った己の身体、手と足と胴に纏わりつく、あの魔法陣。
感触もないのに、確かにその幾何学模様によって私は縛められている。いよいよ混乱が境地に達し、未知なる恐怖に、情けないながらも涙までが滲み出た。
それを眼にした奴の反応は劇的だった。
「また……それ、かよ……ッ!!くそ……クソッ!!何だってんだよッ!!」
『Ｂｏｏｓｔ!!』
機械を通したような声がした。と思う間もなく、その左手。
感情を押し込め、今まで黙りこくっていた一誠がそれを爆発させると同時、その左手に赤い小手が出現した。
どこからともなく、前触れもなく、何もない所から突然と。
マジックにしてもたちが悪い。私は震え声になりながらも、口にした。
「あ、アンタら、何なのよ……っ。なんで、私に、こんなこと――」
びゅおっ。
風切り音。風圧が頬の傷をえぐる。
目の前に、あの小手に包まれた拳が静止していた。
私は殴られかけたのだ。
「――ッひ!!」
堪えきれず、身体が震え始めた。
理由のわからぬ嫌悪。暴力。そして何より、松田の眼。
心が折れるには十分だった。そんな私に、赤髪は慈悲もなにもなく、ただひたすら冷やかに、言う。

「『なんで』ですって？まだしらを切るつもり？私でも見抜けないくらい、うまく人間に化けてることは認めるけど、よくそれだけで誤魔化せると思うわね。よりにもよって、イッセーに」
「……間違えるはずがないっす。一度は……恋人だったんだから」
白髪の小娘とシルバーブロンドの優男に止められていた左手を引き戻し、一誠は気味の悪い生物でも見るような眼を私に向ける。怒りと忌避と、そして眉が歪められていた。
咽喉が縮み上がっていた。まともな思考はもうない。私は半ば反射的に、その言葉を繰り返した。
「こい、びと……？」
それが、理性を引き戻す致命となった。
「……ッ!!ああ、そうだよッ!!殺されるまで、俺はお前のこと、彼女だって思ってた!!大切にしようと思ってた!!でも……それをお前は裏切ったんだろ!!なあ!!
――堕天使レイナーレ!!」

知らない。知らないのだ。そんなことは。
憶えていない。記憶にない。そんな力などない。だから、私は悪くない。けれどそんなことは、眼も耳も塞いだ私の言葉では、彼らは承知などしないだろう。
投げ捨てるから、私でさえ『正しい』がわからないのだ。

「――い――おい……おい！夕麻ちゃん!!大丈夫か!?生きてるよな!?」
松田の声だ。私は目を開けた。真っ暗の中に月明かりが、安堵する彼の顔を照らしている。
「怪我、してんのか……？……くそ……ごめん、ほんとにごめん、夕麻ちゃん。リアス先輩に頭触られて、そしたら急にぼーっと……いや、それでもまさか、夕麻ちゃんのこと忘れて置いて帰るなんて……最低

だ、オレ……かーちゃんと桐生にはっ倒されて、それでようやく目が覚めたんだ。二人とも別の所を探してくれてて、オレは先輩たちのオカルト研究部に……ああ……ちが、違うんだ……そんなこと言いたいんじゃなくて……だから……つまり……夕麻ちゃん、オレと……家に、帰ろう……？」

滅茶苦茶な言葉はいらない。そうだ。最後の、その眼に私が映っているのを見ただけで、十分。……十分だ。

私を拘束している魔法陣に松田が触れると、途端に薄れてあっさり消える。手も足も自由を取り戻し、私はうつ伏せの身体を持ち上げた。垂れた髪の隙間で、松田の唇が動いた。

「夕麻ちゃん……オレ、こんなだけど、まだ――ッッッ!!??」

抱き着いて、唇を奪った。眼と眼が触れ合うくらい近くに、驚く松田の汗まみれの顔。

押し倒し、舌をねじ込んでも、暴れる手足は私を拒絶しなかった。

目の前に銀紗が散るくらい長いキスが終わり、顔を離す。荒い息が重なる。お互いに顔が真っ赤だ。松田は私にへばりついたままの目をわななくように瞬かせ、私はその様子で妖艶に歪んだ。

そして、見つめ合ったまま、口にした。

松田――

「――セックス、しましょっか」

後編

ボタンに手を掛けても、松田は唖然としたままだった。

ぷち、ぷちと、ゆっくり焦らしてやっても、視線は固まって動かない。窓の月明かりを背にする私を、ただじっと、その眼に映し続けている。谷間まで晒してやっているにもかかわらず、馬乗りになった私のお尻を押し上げる変化はなかった。

童貞らしく、パニックで頭が真っ白になっているのだろうか。

当然のことながら、最初に出会ったあの日以降、私は松田に迫ったことなど一度もない。向こうからもそうだ。約束がうやむやになり、大義名分を失ったが故のヘタレた気性。封じてきた変態性も大きいはずだ。押し込めた欲望が突如解放の機会を得て、ショックに放心しているのだろう。

いや、そうでなければならない。

そうでなければ、その眼は見透かされているような気がして怖かった。

そんなわけがないのに、その程度の『予想にない反応』ですら恐れてしまう。衝動任せにキスなんてするんじゃなかった、という後悔もそれのため。純情な松田をその気にさせるだけなら、もっとかわいらしい方法を取るべきだったろう。

だが実際、こうなった。そしてそれは衝動だ。理性ではなく、感情によって引き起こされた行動。

つまるところ、本心ではこうなることを望んでいた、のかもしれない。私を見てくれるその眼が変わらないことを、信じたかったのかもしれない。

穿ちすぎだとは思えなかった。その想いを、私は決して笑うことができないのだ。

楽観しすぎている。絵空事でしかない。理性がそう訴えるが、ゆっくりと深呼吸してみても、一度抱いてしまった想いは消えない。込み上げる言葉を必死に押し留めつつ、服の裾に手を伸ばし、抓んで、力任せに握り締める。その動作の一つ一つですら、今の私には目が眩む

ほど怖かった。
松田に胸を晒して反応を楽しんでいたあの頃では、絶対に感じ得ない類の不安。あの頃のような情欲を向けられることが、今は怖い。そしてその恐怖は、やはり期待の裏返しだ。
どう取り繕っても、消えないのだ。
（……ああ）
十分だって、私を見ているだけでいいって、そう思っていたのに。
私はいつの間に、こんなにも強欲になってしまったのか。
もっともっと、深くに欲しい。松田の眼の私を見つめてそんな不安に襲われながら、私は一思いに布地をめくり上げた。
「――まっ、待てよ夕麻ちゃん！」
しかし脱ぎ捨てる決意をして間もなく、跳ね起きた松田がそれを留めた。勢いで馬乗りから膝の上までずり落ちた私のお尻。腕を掴まれ、胸の下で白幕が停止する。冷えるお腹周りとは裏腹に、心へ熾火のような熱が灯った。
それと比例して重たくなる口で、私はなんとかそれらしい笑みを作り直した。
「対面座位がいいの？男は感じにくいって言うけど……ああ、童貞だし、ちょうどいいかもね」
「どっ……ちげえよ、夕麻ちゃん！今はそういうんじゃ……冗談言ってるんじゃなくて……！」
一瞬頬を赤らめてから、松田は私の両手を取り上げる。指が解け、彼の眼から肌色が減ったと同時、吐かれた小さなため息から、明らかに好色のそれではない声色が流れ出た。
「夕麻ちゃん、あの後……オレが、夕麻ちゃんを置いて行っちまった後、何があったんだ……？」
私の勘違いでなければ、それはたぶん、心配。逃げることなく、まっすぐに私を捉えるその感情は、とても温かくて、眩しすぎる。
誘惑の笑顔が崩れてはいないか。保つだけで精いっぱいだった。
「どうだっていいじゃない。そんなことよりも、ほら、ずっと前にした約束、忘れちゃった？ここならお母様もいないし、最後までできるわ

よ？……ねえ、ずっと欲しかったんでしょ、私のこと。アンタなら、私は、あげても――」
「夕麻ちゃんっ!!」
見たことのない気迫が目の前で炸裂した。背が跳ねあがり、言葉が吹き飛ぶほどの迫力。放った松田の、その厳めしい表情に高鳴ってしまう心臓が煩わしかった。
傾き始めた心の通りに慄いているであろう私に、彼はやはり心配そうにして、手に包んだ私の両手を温めていた。
「頼む、夕麻ちゃん。教えてくれ、あの後一誠から……リアス先輩たちから、何を言われたのか……」
まるで自分のことのように、苦しげに押し出されたその言葉。どこにも私の身体を、いや、この身体を欲するそれは見つけられなくて――
「――わ、たし……」
揺れた声は、ほんの一瞬だけ幻想を追ってしまった。
「……レイナーレ、って、いうんだって」
それでも、私（夕麻）を見てほしくて。
始まればもう止められない。目を見開き、息を詰める松田の冷えゆく手のひらを感じながら、私はぎこちなくおどけてみせた。
「しかもさ、人間じゃなくて堕天使なの。でもってあいつらは全員悪魔。さっきアンタが解いた魔法陣みたいなのとか……、他にも色々、わけわかんない力が使えるって、言ってたわ。あの赤髪によれば、私も同じようなことができるらしいけど……ね、バカみたいな話でしょ？」
けれど、きっとそれは本当なのだ。どれだけ荒唐無稽（こうとうむけい）な話でも、それを叫んだ奴らの感情は本物だったから。
ただ、私がそれを信じたくないだけ。
「しかもそれだけじゃないのよ。私がその力を使って……何人も殺しただとか、その挙句にあいつら悪魔に殺されたはずだとか、世迷言がいっぱい」
「殺され……って、ほんとに一誠たちがそんなこと言ったのか……？

堕天使も悪魔も、夕麻ちゃんがそんなこと……ありえねえだろ……？」
「私もそう言ったわよ。でも、聞いてくれないの」
現実味のない話。突拍子もない話。気が触れたのかと疑われそうな常識外の連続だったが、松田はしかし、その身で体験してしまったが故に頭ごなしな否定ができない。笑い飛ばす代わりに混乱してしまったらしく、俯いて黙り込む彼の手から、私はそっと両手を引き抜いた。
汗でべたつく頬に添えて私の方を向かせると、微笑み、そして、哀れっぽい細い声を口にした。
「それでね、私このままだと、冥界って所に連れて行かれちゃうらしいの。そこで悪魔とか堕天使とかに裁かれて、どんなに軽くても数百年は牢屋行きだって。最近、永遠に氷漬けにされた人もいるらしくって、それよりはマシでしょって言われちゃったわ。冥界の司法って、とんでもないわね」
松田が口の中で『嘘だろ』と呟くのが聞こえた。そう、冗談みたいな話だ。でもきっと、もうちょっとでも経てばそうなる。
「人違いだって、何回言っても嘘呼ばわりされちゃうのよね。かと言って、逃げようにも私は抵抗なんてできないし。あんな奴らに囲まれて、私、何されちゃうのかしら。拷問とか凌辱とか、されちゃうのかしら。
……ねえ、そうなったら、もう二度と会えないわね」
だって松田も、きっとまた記憶を消されてしまう。
だからそうなる前に、刻み込みたい。消されても消えないくらいに、深く、強く。『レイナーレ』ではなく、『夕麻』としてその眼に映ることができれば、きっとそれは、一人きりの心をも温めてくれる。
「だから、今の内よ？」
所詮、恐れに負けた中途半端な告白だ。他人事（真偽のわからない）の話だから、この話が真実であることなど、松田は知らない。確信できない。私が『レイナーレ』であったことは、彼にとって気にしようにも気にできない、朧げな『かもしれない』でしかないのだ。

そんな朧げな認識。そこからもたらされる私が『夕麻』である確証も、同じく朧げ。それは、本物ではない。

でも――

「――抱いてよ、松田」

肩に伸びる手。私(夕麻)の身体を欲している眼。『レイナーレ』を知っても、『夕麻(私)』を見ている眼。

それが霧のようなものだとしても、今は、そこにある。今はまだ、松田の中の私は『レイナーレ(他人)』ではなく、『夕麻(私)』だ。

例え松田が忘れても、思い出だけでも、私はそう思うことができる。

なのに、それすらも。

「夕麻ちゃん、でも、オレは――」

がらがしゃん

建付けの悪い片引き戸が乱暴に転がり、ガラスが鳴った。ぬるい幸福感が荒々しく剥ぎ取られ、弾かれたようにして私の身体が反転する。いくつもの足音が踏み込み、そしてその一つ、先頭に立つ一誠の苦り切った顔が私たちを見つけると、途端あっけにとられたようにたたらを踏んだ。

続く後ろの連中にも似たような動揺が広がる。その中で、金髪の気弱そうな小娘だけが違わず私を見つめていた。

「レイナーレ様……」

困惑に揺れるその声と眼が、私の恐れを酷くしてやまない。思わず、松田の腕の陰に隠れる。

すると意気を取り戻した一誠が肩を怒らせ、糾弾の怒号を噴き出した。

「てめえッ、どれだけ往生際が悪いんだよ、レイナーレ！さっさと松田を解放しやがれッ!!」

絶対に嫌だ。強くそう思った。しかし奴に植え付けられた恐怖心は衰えず、私の身体は意に反して震えるばかりで主張を為さない。

腕に縋りつく力のその無意識を唯一理解してくれる松田は、私の肩を抱き返しながら、低く唸るような懐疑を一誠に向けた。

「お前……本当に一誠か……？それだけじゃねえ、オカルト研のメン

バーが全員悪魔だったってのも、冗談じゃなく、マジな話なのか？」
「……俺は本物だし、部長たちが悪魔だってのも本当だ。まあ俺は、つい最近悪魔になったばっかりなんだけどな」
一瞬怯み、一誠は言い辛そうに答える。しかしすぐに私へ怒気を戻し、左腕をかざしてみせた。
『Ｂｏｏｓｔ!!』と、やはりあの赤い小手が、どこからともなく出現する。
「簡単には信じられねえだろうし、わけわかんねえだろうけど……安心しろよ松田。今度こそ、ダチは殺させねえ。すぐにその堕天使をぶっ飛ばしてやっから」
「ええ、イッセーの言う通りよ」
遮るように赤髪が前へ進み出た。私に負けずとも劣らない肢体が松田に曝され、私と彼の身体の強張りが同時に強くなる。身震いは治まらない。
「けれど、せめて最後のチャンスをあげるわ、堕天使レイナーレ。松田君を解放しなさい」
「……い、や」
辛うじて声の体を為した空気の振動は、続く赤髪の調子を事務的なものに変えるだけだった。
「……貴女がやったことは、既にアザゼル総督へ報告したわ。三大勢力で和平が結ばれた直後の今、しかもコカビエルが起こした事件の負い目もある『神の子を見張る者』が、貴女の行いを支持することはあり得ない。むしろ喜んで討伐指令を出すでしょうね。……それでもまだ、私が嘘を言っていると思うなら――」
声色が変わった。冷たく鋭く、私を射抜く紅の目。敵愾心が眼に見えるようで、臓腑がさらに締め付けられる。
「皆、躊躇しないで。和平があるとはいえ、ここは私の領地。私の領地で起こった問題は、私の責任。……堕天使レイナーレ、私の領民に二度も手を出したその罪、万死に値するわ。グレモリー侯爵の名において、もう一度貴女を吹き飛ばしてあげる！」
窓はどれも締め切られているはずなのに、冷たい風圧が私の顔を叩

いた。床に積った埃が吹き飛び、月明かりに反射して煌めくその光景は、私にとって恐怖でしかない。赤髪の身体から噴き出る湯気のようなオーラに、眼前まで迫った一誠の拳を想起した。
あの、死の恐怖。本能から来る恐怖心に囚われ、私は必死に体温の熱を掻き抱く。
そんな私の視界を己の背で塞ぎ、片膝立ちになった松田が叫んだ。
「待てよ！リアス先輩、あんた勘違いしてるんだ！オレは人質なんかじゃねえ、自分の意思でここに来たんだ！そもそも夕麻ちゃんはあんたが言うレイナーレじゃ……堕天使だの悪魔だのじゃない、普通の人間の女の子だ！罰を受ける理由はねえ！」
「そう思い込むよう、暗示を掛けられているのよ、松田君。……混乱させてしまってごめんなさい。まさか私が上書きしきれないほど強力なものを使えると、思っていなかったの」
「あるいは仲間に掛けなおされた、という可能性もありますわ。彼女が生きている理由がわからない以上、他三名の堕天使も死んでいるとは言い切れませんもの」
黒髪のポニーテールが笑う。すべてを見下すような口調が血中を冷水となって駆け巡り、松田はそれを吹き消すかのように声を張り上げた。
「だから操られてなんかいねえって言ってんだろ!?なんだよ、さっきから自分の頭の中だけで全部決めつけやがって……！なんで皆、夕麻ちゃんを見ようとしねえんだ!!」
「見たんだよ、お前よりよっぽど!!」
空気がビリビリ震える。視線なんて通っていないが、一誠の嫌悪に憎悪が混じる様子は気配でわかった。他でもない親友であり、当人の口から、それが告発されようとしているのだ。
今すぐ止めたい。そう思うことだけで精一杯。祈るように、松田の腕に額を押し付ける。
「どんなにいい子ぶってても、内心じゃあこっちを見下して、嗤ってんだ。松田、お前がどんなにそいつのことを想ってても、そいつにとってはその想いに価値なんてねえ！喜んだ顔だって、驚いた顔だって、

照れくさそうな顔だって、全部……全部、演技だった……夕麻ちゃんなんて全部、嘘っぱちだったんだよ!!」
「ッ!!一誠、てめえいい加減に――」
冷たい処刑刀が、首筋に食い込んだ。
「俺はお前みたいに信じて、殺されたんだッ!!」
松田の激昂がぴたりと止まり、そして微かに、背中の私を気にしたように思えた。
干からびた喉の奥が引き攣って、血の味がした。
「俺だけじゃねえ、アーシアも……『至高の堕天使』になるため、なんてくだらない理由のために殺された。悪いことなんてなんにもしてない、傷ついている人がいたら迷わず助けるような、こんないい子に……あんな仕打ちを、だぞ?……俺は、許さねえ……許すわけにはいかねえんだよ、レイナーレ。お前も……アーシアを守れなかった、俺自身も……!!」
声帯からは息だけが零れる。床材の木目が奇怪に歪み、胃の底がせり上がってくる。
恐ろしい。怖くてたまらない。一誠の殺意ではなく、その親友としての叫び(真実)によって、松田の眼が変わってしまうことが。
だが、それを黙って受け入れてしまうことなど、もはや私にはできない。希望を見出してしまった私には、到底、受け入れがたい。諦める気など、そもそもないのだ。
だから、また頑張るから、せめてアンタが私を忘れてしまうまでは――
「今度こそ、守ってみせる。俺の友達は、もう二度と殺させねえ!!」
私(夕麻)に私(レイナーレ)じゃない人を見ないで……。
「――しら……な、い……ッ!」
抱きしめた松田の腕を支えに背中から這い出して、私は狭い気道を引き裂いた。
擦れて悲鳴のように憤怒を貫いた懇願。松田はもちろん、一誠にも届いたそれに、彼の表情が消えた。
「……は?」

どろりと、暗い眼に蠢く陰は、その身から一時威圧感を消し飛ばす。しかし知らずに目線を置く私は、込み上げる否定の恐怖をかき分け、合間から松田への言い訳を並べ続けた。

「い、一誠ってやつも、アーシアってやつも、知らない……！聞いたことも、顔を見たこともない、殺したことなんて、ほんの少しも憶えてないわよ……ッ！」

松田にとって、私のこの震えは慟哭だろうか、それともやはりただの言い訳に聞こえるのだろうか。でも、これが私の本心だ。知らない人間がしでかしたことの責任など取りたくないし、取れない。

しかし同時に、その知らない人間は、私自身であることも事実。故に顎の先でも視界に入るのが恐ろしく、私はまた一歩、マシな恐怖の方へ這う。

並ぶ奴らの嫌悪の眼に、必死になって吐き掛けた。

「大体、そんなオカルトめいた力が私に使えるなら、汗水たらしてアルバイトなんてするはずないでしょ!?アンタみたいに操ればいいんだから！お母様にお父様に桐生にとだって、ずっと楽に付き合えるはずだもの！」

でもきっと、そうして松田家を乗っ取った私は、『夕麻』にはならなかっただろう。

名もなき支配者として君臨し、命じられるがままの彼らに貢がれてふんぞり返る。すべてが自身の意のままに動く箱庭の世界を作ったならば、果たして私は正気でいられただろうか。

その想像は吹雪のようにただ白く、冷たかった。私を認めてくれた松田がいなければ、私はそのまま、空っぽだ。『夕麻』でも『レイナーレ』でもなく、認識すべき『自己』がない、人の形をした血肉の塊。

自分すら見失ったあんな思いを抱えたまま、死んでいないから生きていくことに、私が耐えられるとは思えない。

私は、私（夕麻）を初めて認めてくれた松田に、要らないと言われたくなかった。

『自分が何者なのか（生きる意義）』を、また再び失いたくないのだ。

「『レイナーレ』は、私じゃない。私は……『夕麻』、なのよ……！」

私(夕麻)を見捨てられたくないのだ。
両腕が熱く痺れた。
が、それを踏み砕くようにして、
「――いい加減にしろよ」
一誠の怒りが、瀑布の如く押し寄せた。
尋常なそれではなかった。今まで覗いた憎悪など欠片でしかなかったと思わせるほど、深く激しく、そして純粋。ありとあらゆる残酷を感じさせる眼が淀んで私を射抜き、そのあまりの強大さは、余って身体の震えすら縫い留めた。
涙は出ず、想いまでもが飲み込まれ、私はただただ絶望感に蝕まれながら、自嘲気味に歪むその口を見た。
「知らないだって？憶えてないだって？だから、自分じゃないだって？……お前……本当に……」
小手の拳を握り締め、俯いた彼と眼が切れる。ほんの一瞬無意識に安堵して、それからすぐに吹き飛んだ。
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ!!』
赤い小手が出現した時と同じ、唐突で前触れなく。一誠の身体を、今度は赤い全身鎧が覆った。
爪先から頭の先まで、隙間なく金属質の赤色。龍のような兜の小さな緑色の眼が、まっすぐ私を捉えて言う。
「……よくわかったよ、夕麻ちゃん。やっぱりお前は、どうしようもねぇクソ野郎だ」
その手が持ち上がって継ぎ目が擦れ、私はようやく、掴んだ腕の感触を取り戻す。鋭い指の切っ先は私を通過し、気遣わしげに手を伸ばそうとした赤髪を制した。
「イッセー……」
「大丈夫っす、部長。こんなヤツにいつまでも振り回されるなんて下らないって、思ってたところだったんです。……ケリ、付けてきます」
がしゃ。重い金属片が連なって鳴る音。一誠が、私を目指して踏み出した。
荒々しい圧力が吹き荒れ、それから眼が離せない。蛇に睨まれた

蛙、なんて程度では断じてない、死の恐怖、絶望感が、一歩ずつゆっくりと近づいてくる。心臓が凍り付く。視覚聴覚、理性に本能に何から何までが集約され、身動き一つできぬまま、じっとそれを見守った。

腕の熱では到底誤魔化し切れないソレが、とうとう、腕を伸ばせば届く距離で、立ち止まる。

「――いや、よ。まだ……私は、まだ――」

遅すぎる抵抗も一蹴され、

「今度こそ、俺が、ぶっ殺す――」

拳が握られた。

「ふざけんじゃねぇぇッッッ!!!」

と。

一瞬、目を疑った。疑って確かめて、そして目尻から涙が滴った。

松田の怒りは、私を守ってくれていた。

飛び出した拳が兜を打ち上げ、吹き飛ばす。私への殺意は霧散し、よろよろと後退する鎧は、壁際で尻もちをついた。拍子に頬の装甲が剥げ落ちる。走ったヒビはすぐ兜全体に広がり、やがて破片と赤髪たちの心配の喚声を浴びる彼は、露になった眼と同様に唖然とした声をぽつりと漏らした。

「――なに、すんだよ」

息を吹き返し始めた黒い炎が眼に戻り、歯を食いしばる一誠は、助け起こそうとする金髪の小娘の手を抑え、一人で立ち上がる。視線は私に、意識はたぶん松田に向いていた。

「やっぱり松田、お前が操ってんだろ……？じゃなきゃお前みたいなやつを、あいつが庇おうとするなんて――」

「ダチのお前だから、黙って聞いてたけどな、一誠」

憎悪の渦に踏み込み、松田は立ち上がる。一緒に私も腰を上げた。握り締められた拳の激情が、滴る血と一緒に流れ出ていくのを、逆の腕にしがみつく私は感じていた。

怒りと空しさとで、松田は一誠の叫びを受け止めた。

「これ以上知ったふうな口をきくんなら、夕麻ちゃんに手を出そうってんなら――許さねえぞ」

「嘘じゃ、ねえんだよ……ッ！松田！俺とアーシアは、確かにそいつに殺された！間違えるわけがねえんだ!!」
「ああ、記憶を失う前の夕麻ちゃんがレイナーレって奴だったってことは、そうなんだろ。それはもう疑ってねえよ、お前がそんな嘘をつくはずがないしな。それに……少しだけ思い出した」
「何をだよ!!」
唸るように一誠が悲鳴を上げた。
手の中で腕が滑り、私たちの手のひら同士が触れる。ごく自然に繋がって、いつも通りの汗ばんだ熱が心臓に伝った。
「何話したのかまでは覚えてねえけど、何ヵ月か前、彼女だっつってオレと元浜に夕麻ちゃんを……レイナーレを紹介してきたよな？それと、自分に彼女が居たはずだ、って騒いでたこともあったろ。こっちはよく覚えてる。なんせこの後すぐ、お前がオカルト研に入ったんだからな。お前の言うレイナーレってのは、つまりこの時の娘（こ）だろ？」
「そうだ!!そしてそいつは、今そこにいる!!……そこまでわかってんなら、操られてねえって言うんなら、松田、お前はなんでそんな奴を庇えんだよ!!なんでそんなに、そいつを信じられるんだよッ!!」
絶叫。暗い感情がめちゃくちゃになって暴れまわり、私たちに吹き付けている。タールのようにドロドロで、ガラスのように鋭利で鋭く、氷のように冷たい想い。私に、その仔細を知る術はない。
だが、松田は言った。
「一週間、くらいか？」
黙り込む。
「覚えてねえし、てかそもそも知る由なんてねえけど、お前のことだから浮かれてただろうな。デートプランとか必死に考えて、夕麻ちゃんを楽しませようって頑張ってた。初めての彼女を、大切にしたくて。
――その中でお前、どれだけ夕麻ちゃんのことを見てた？」
「見てたって……何言ってるか、わかんねえよ……。彼女なんだから、いつも見てたに……」
「そうじゃねえよ。お前がいつも見てたのは、自分の彼女だ。夕麻ちゃんじゃねえ」

一誠の顔が悲しみで固まった。目線が下がり、前髪の陰に隠れて途切れる。
淡々と、松田は続けた。
「そんなんじゃ、わかるわけがねえんだ。レイナーレが、なんでお前を殺す前に恋人として付き合ったのか、それに、アーシアちゃんを殺してまで『至高の堕天使』ってのになりたがった理由も。……かーちゃんの言葉を借りるなら、夕麻ちゃんって、めんどくさくてわかり辛いからな」
「んなっ……!?」
唐突なお母様からの攻撃が、感じ入っていた私の不意を突いて、間抜けな声を引きずり出す。こんな空気でも松田の顔がちょっとこっちを見てニヤッと笑い、バカらしくなって脇腹をどつくと、同時に戻っていった。
その横顔を、私は見上げた。
「その点オレはたまたまだったのかもしんねえけど、でも、だからこそオレは、夕麻ちゃんを守りたいって思ったんだ。すべてを忘れてしまっても諦めずに頑張ろうとする夕麻ちゃんを、一人でも前に進もうとする夕麻ちゃんを、オレは助けて、それで、笑ってほしかったんだ」
だって
「オレは夕麻ちゃんの身体じゃなくて、心が欲しいんだから」
――たぶん私は、ずっとこれが欲しかったのだ。
言うなれば、『愛』。奪い取るものでも、対価を払うものでも、有用性から得るものでもなく、ただ『私』であるために捧げられる想い。絶対的に普遍的に、変わらず私を照らしてくれる光。
誰にも自分を見てもらえないことは、悲しい。誰にも見てもらえないのなら、自分はいないも同然だ。だからスポットライトを探す。身体でもお金でも敵意でも、何でも光が当たれば見えるかもしれない、見てくれるかもしれない。内に隠れる『私』を。
見て、『私』を知って、欲してほしい。必要だと、認めてほしい。それでようやく、私は『私』に意味を見出せる。生きることができるのだ。

きっとそんな、めんどくさい願い事だった。
「……」
私と松田は、互いに見つめ合っていた。何も言葉はなく、ただじっと、その眼に映る自分を確かめるように、現実であることを確かめるように。自分が相手の中に根を張ったことを、多幸感に揺蕩いながら眺めていた。
たとえ記憶を消されても、きっとこの想いだけは残り続ける。それで、十分すぎるほどに満足だ。
そんな充足感で、私は微笑んだ。
「嘘に……決まってんだ」
一誠の小さな呟きが、やけに響いて轟いた。
今にも泣きだしそうな声だった。俯いたまま、握りこぶしがわなないている。
「お前も、俺も、騙されてたんだ。そうに決まってる……そうじゃないと……俺は……ッ!!」
たぶん、前に彼の暴力にさらされていたからなのだと思う。敵意の枯れた一誠の身体が傾き、床板を蹴り飛ばしたその瞬間、剥かれた眼に気付いたのは私だけだった。
それは本当に刹那の間で、その間に巡った私の想いは言語化できないほど早く身体に走り、動かした。ただ振りかぶられただけの一誠の致命なる攻撃に自ら対峙したのは、いったいなぜなのだろう。松田を庇ったつもりなのか、それとも……。
しかしどうであれ、それが確かめられることはなく。
眼前を蒼の銀閃が横切った。
殴りかかろうとした一誠の身体を、吹き飛ばすではなく弾き飛ばす。スーパーボールみたいに跳ね返った鎧は、木造りの窓枠と窓ガラスに突き刺さり、その一画を押し潰した。
より多くなった月明かり。少しだけ増した光量の中に、私と彼との間で青い大剣を構える青髪の女の姿。
一誠を撃退した彼女は、『Ｒｅｓｅｔ』という機械音声と共に消え去る一誠の鎧を見届けると、小さく息を吐いて構えを解いた。

見覚えもなく、助けられた意味もわからない。味方ではあろうがしかし、突然すぎる登場に理解が追い付かず、呆然とするしかない私は、緊張を吹き飛ばされたために久方ぶりに認識に入った、赤髪のヒステリックな喚き声を聞いていた。
「ゼ、ゼノヴィア!!何をしているの!?私が、隙を突いて撃退しなさいと言ったのは、一誠ではなくてそこのレイナーレでしょ!?」
青髪、ゼノヴィアは、その鉄仮面で申し訳なさそうに答えた。
「命令違反は謝罪する、リアス部長。しかし彼らを見ていたら……私がそのレイナーレと面識がないだけかもしれないが、どうしても倒すべき敵に見えなかったんだ。本当に、彼女はアーシアやイッセーを殺した堕天使なのか?」
「当たり前でしょう!?松田君だけでなく、そのお母様や桐生さんにまで記憶操作を施すような狡猾さと邪悪さ、それに顔も声も同じ。何よりそのことは、操られている当人でさえ理解してるわ!人間にしか見えないのは、何かきっと……高位の魔道具か、術式を使っているからよ!」
「しかし……」
なおも納得がいかないと、ゼノヴィアが眉をひそめたその時、覆いかぶさる、引き戸の軋み。
つい振り向くと、そのオッサンと眼が合った。
「オレが止めてたんだよ。ちょっと事情を知りたくてな」
派手に胸元が開いたコート姿のチャラそうなオヤジが、框に背を預けて気取った口調を吐いていた。
次から次へと、この異常な場に現れる見知らぬ人々。いや、本当に『人』なのだろうか。あいつもゼノヴィアも、もしや悪魔……?それは、敵?味方?
深まる混乱に目を瞬かせる。オッサンは微かに笑みを見せてから目線を外し、それと同時に松田の身体から強張りが抜けたことが、繋いだままの手越しに伝わった。
「ゼノヴィアに、アザゼル先生も……!?ひょっとして、悪魔だったんすか……?」

「ゼノヴィアの方はそうだな。だがオレは違う、堕天使だ。でもって総督。堕天使の中で一番偉いんだぞ？……どうだ、驚いたか？」
背を離して胸を張ると、背中から黒い翼がわしゃわしゃ生えてきた。驚く間もなく、吸い込まれるようにして背に消えてしまう。魔法陣はまだしも神秘的だったが、正直これはキモイ。その上一番偉いなんて自称を聞いてしまえば、途端にチャラい雰囲気が増して胡散臭く思えた。
呆然の眼が白い眼に変わりつつある私。しかし赤髪一派との間に交わされるやり取りで、好感の度合いは一気に上に昇った。
「しかし、よりにもよってお前たちがなあ。まさかただの人間を囲んでいたぶる趣味があるとは思わなかったぜ。こりゃあ、サーゼクスにどう報告したもんかねえ」
「……ただの、人間……？」
ガラスと木片に埋もれて沈黙していた一誠が、ゆらりと呟く。オッサンは「ああ」と何でもないふうに答えた。驚き絶句する赤髪たち。刃物のように鋭い眼が、黒髪のポニーテールから飛ぶ。
「自身の部下が使う変化を見破れないとは思いませんでしたわ。能力も把握していないなんて、堕天使、『神の子を見張る者』とは、ずいぶんザルな集団なのですわね」
「なわけねえだろ。朱乃、もしそうなら今頃は、オレもお前たちもまとめてコイツに殺されてるよ。そんで成り代わってクーデターだ。……だからな、オレクラスでも何ら掴ませずに欺けるのなら、そりゃあ間違いなくコカビエル以上に強いってことだろうがよ。そんな奴が目覚めたての赤龍帝に殺されるわけがねえ」
「ッ！ふざけないでアザゼル！そんな無茶苦茶な理由で納得しろと……あの時した謝罪は嘘だったと言うつもり!?」
「アザゼル先生、だ。……信じられないってんなら、一つ誓ってやろうか？　堕天使総督としての地位にかけて、その夕麻は完璧にただの人間だ。堕天使の特性なんて欠片もねえし、レイナーレとは、他人だよ」
「それは……」

吠えた赤髪が、有無を言わさぬオッサンの迫力に怯んで口ごもる。代わりに一誠の声が虚ろに震えた。
「でも、他人なわけねえんだ……。そいつはその手で、間違いなく、俺と、アーシアを……」
ガラス片と木片をまとめて踏みしめる音がした。ちらと視線を移したオッサンはやれやれといったふうに肩をすくめ、金髪の小娘の手を借りて立ち上がる一誠に歩み寄る。そして今度は、諭すような静かな声色。
「一誠、お前、全く身に覚えがない罪のために罰を与えられたら、受け入れられるか？例えば、そうだな……オレがお前の身体を操って、それでリアス・グレモリーやアーシア・アルジェントを殺したとしたら、操ったオレと操られた自分、お前はどっちが憎い？どっちが、罰を受けるにふさわしいと思う？」
一誠は項垂れ、何も答えられなかった。
オッサンはその頭を、叩くように乱暴に撫でた。
「ま、頭冷やして呑み込んどけ。後始末はオレがやっといてやるよ。……ほら、お前らも早く散れ。悪魔家業の時間がなくなっちまうぞ？」
「……貴方に命令される筋合いはないはずよ。和平が成ったとはいえ、あくまでこの街の管理者は私たちで――」
「そういうのもまとめて監督するのが今のオレの役目だ。口を出す権利も当然ある。……はあ、それでもまだ疑うってんなら、サーゼクスでも誰でも呼んで聞いてみろ。オレと同じ答えが返ってくると断言できるがな。わかったら、さっさと行けよ」
「……」
またも撃退され、口を噤む赤髪。その赤眼が私を見て、すぐに戻った。もう何の感情も伺い知れなかった。
「……行くわよ、皆」
短く言って、オッサンの横を通り抜けた。嫌悪を隠そうともしない黒髪のポニーテール、最初の時に私の腕を戒めた白髪の小娘とシルバーブロンドの優男が訝しげに眉を寄せ、後に続く。ゼノヴィアも、

軽い会釈をしてからこの部屋を出て行った。
そして、一誠と金髪の小娘。足元もおぼつかない一誠と、それに肩を貸す非力な小娘が、遅れてオッサンに見送られ、そして私たちの前を横切った。
その背中に、松田が呼び掛けた。
「一誠」
脚が止まった。
「――またな」
緊張をはらんだ声だった。私も知らずの内、手に力を込めていた。
それを聞いた一誠は、
「……」
僅かに、頷いたように見えた。
その肩越しに、私は金髪の小娘と眼が合う。びくりとする裏腹、彼女は祈るみたいに目礼だけして、框を潜った。
足音が遠ざかる。やがて、聞こえなくなった。
「……ったく、厄介なガキんちょ共だ。まあ、また赤龍帝の禁手（バランス・ブレイク）化を見れたのは収穫か。人間のパンチ一発で壊れるほど、大分不安定だったが……さて」
オッサンがこっちを向くと同時、松田が私の手を引いて背に庇った。数瞬間を置いて私もそのことを思い出し、解けた脳味噌を締めなおす。が、すぐにその憂慮は否定された。
「ああいや、記憶を消すとかそういうつもりはねえよ。あんま警戒すんな、夕麻だったか、お前が何故完全な人間になれたのかは興味があるが、今は他にやるべきことが山積みでな、それに割ける暇はねえ。……そのまま帰っても、残ってもいいぞ。壁と窓の修復をするにせよ、明日のことだしな」
ニヤニヤ笑いと共に松田の手が熱くなり、それで益々厭らしく笑うオッサンは、コートを翻して向けた背で、キザに片手を振ってみせてくる。それがやたらとさまになっているものだから、その分だけまた胡散臭い印象が強まった。
剽軽を感じるせいでその言葉も疑い深く思えてきた。松田の肩か

らそんなことを考えつつ見やっていると、出て、引き戸の取っ手に手を掛けた彼の顔が不意に私を捉え、そのにやけ顔にほんの少しの陰を滲ませた。
その瞬間だけ、オッサンはただの人間に見えた。
「悪かったな、夕麻」
「……何が、よ……？」
迷った末、勝手にぼそぼそと噴き出た声は、オッサンを元のニヤニヤ笑いに戻していた。
「いや、ただの懺悔だ。気にすんな。……じゃあな」
建付けの悪い引き戸を後ろ手に閉め、彼もまた、外の廊下に消えていった。
――二人きりだ。
足音も消えたその瞬間、私は強くそう思った。松田と、『私（夕麻）』だけ。もう『レイナーレ』の影も、『私』の陰もない。松田の眼は、私を見てくれている。そのことが、びっくりするほど幸せに感じた。
もう消えない。もう失われない。ようやく手に入れた、私の居場所。
私はそっと、松田の肩に頭を乗せた。
いや寸前まで乗せようとしたのだが、次の瞬間我に返った。
そんな安っぽいメロドラマみたいな展開など、奴のそのエロ根性の前に成立するはずがなかったのだ。
「と、ところで、夕麻ちゃん、その……せ、せせっせ、セックス、の、話は、い、いつ頃を予定すればよろしいのでしょうか……？」
「……アンタ、それ本気……？」
今までで類を見ないほど、情欲塗れの声だった。
「この流れで普通誘う？『心が欲しい』はどうしたのよ？」
「そ、それはそれとして……身体も欲しいな、って……ほら、夕麻ちゃんが家に来てから、一人で……あの……自家発電もできなかったし……」
――バカ。
「さっきの夕麻ちゃんもすっごい、え、エロかったし……我慢してたけ

ど、結構前から愚息が……」
「はあ、付き合ってらんない。さっさと……帰るわよ。お母様と桐生に、お詫びとお礼言わないと」
ため息と一緒に吐き捨てるように言ってやって、私は、前かがみになって途端にかっこ悪くなった松田を放り、閉められた引き戸に手を掛けた。
情けない格好で『今じゃなくてもいいから』なんて縋ってくる彼をガラスの反射に見ながら、おんぼろで重いそれを引き開けた。
その時、ガシャガシャうるさい騒音に紛れるようにして、
「……その内ね」
呟くように言った。
「え？夕麻ちゃん、何か言った？」
「ふふ、何でもないわよ」
顔だけ振り向いて笑ってやってから、私は松田の手を引っ掴んで無理矢理引っ張っていった。
入り込んだ夜風が、熱い頬に心地よかった。